
魔王と勇者は同級生

中田 中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と勇者は同級生

【Nコード】

N2170J

【作者名】

中田 中

【あらすじ】

優子には最近気になる人がいる。

ある日その人が告白されるシーンを目撃するが、その話のなかで彼の口から彼自身が好きな人の名前を聞きそうになる。

急に怖くなった優子は、その名前を聞く前に屋上まで走って逃げるが、気がつけば薄暗い森の中にいた。

第一話 気になる貴方（前書き）

- 1、誤字脱字がありましたらご報告お願いします。
- 2、作者は**ずぶ**のド素人です。
- 3、作者は**びつくり**するほど**うたれ弱い**です。取扱いには**ご注意**をお願いします。

第一話 気になる貴方

最近気になる人がいる。

とはいっても『好き』ではなくてまだ『気になる』の段階だが、このままいけば確実に私は彼を『好き』になる。と、自分では思っている。いや、やっぱりもう好きになってるのかもしれない。

短く切った黒髪に、いつもしわのよっている眉間。少し太めの意志の強そうな眉。その下の一重瞼の鋭い目、キュツと固く結ばれた厚めの唇。筋の通った高い鼻。男らしい輪郭に、がっしりとした首。熱い胸板に長い手足。

男くさい彼はよく見ると整った顔をしているのに、せつかくの顔をいつも不機嫌そうにしている、それに輪をかけて雰囲気怖い。しかも無口。

だから他の女の子たちは彼の良さに気づいていないようだ。かくいう私もその中の一人だった。けどあるきっかけが、私に彼という存在を意識させはじめた。

「何してるの？」

「ああ、高田か。」

高校三年の夏は、各部活の引退ラッシュだった。吹奏楽部だった私は、七月末の最後の発表会が終われば引退する。

引退する時期に差はあれど、夏休み前には皆受験モード全開。

でもそれまでは最後の発表を大切なものとしたいから、放課後も遅くまで残って練習していた。

まだ学校側がクーラーをつけてくれないので、七月の初めからは窓をあけて風がはいってくる廊下にでて練習していた。

その窓からいつも剣道場が見えた。

私がいる本校舎の位置からは、柔道場と剣道場が重なっていて中がよくみえる。

特に手前の剣道場は、重い鉄ドアを開けていれば奥まで見通せた。やっぱり道場もクーラーがついていないみたいで、開けっ放しにされていて色んな怒声が飛んでくる。

その中で圧倒的に強い人がいた。

今年初めて同じクラスになった武藤君だ。

武道なんかやったことのない私でも、彼は他とは一線を引いた強さを持ってるのがわかった。

まずなにより美しかった。

まっすぐにのばした背筋からユラユラと出ているかのように見えるオーラや雰囲気すべてが凜と澄んでいて綺麗だった。

遠目からでも、彼の周りのピンっと痛いくらいに張りつめた空気は感じられたし、彼の周りだけ時間が止まっているかのようにだった。

なんでこの三年間気がつかなかったんだろう。それがとても悔やま

れた。

「スゴイ……。」

「何がですか？」

いつも見ていたが、今日はうっかり声に出してしまったようだ。

「あつ、口に出してた？……ここから剣道場見えるでしょ。そこで、同じクラスの武藤君が練習してるんだけどね、桁違いに凄いのよ。ホントに強い人の戦い方ってすごくきれいなね。立ち方からして違う。」

「もしかしてあの人ですか？今打ち合ってる右から三番目のひと。」

「そう、その人。」

後輩が目を細め窓から身を乗り出して聞いてきた。

「……ほんとだ。すごく綺麗。」

後輩のその言い方と、どこか夢を見ているような視線に何故だか胸騒ぎがして不安になった。

彼へ彼女の熱い視線を外させたくて、後輩を無理やり練習にもどした。

「ハイハイ、もう練習にもどるわよ！みんな散った散った！……十二小節目のアウトタクトから始めるよ。……1、2、3」

でもその一人の後輩の目が頭から離れなくて練習にあまり身が入ら

なかった。今思い返すと、彼女の目に怯えていたのだと思う。それにきつと私もあんな目で、彼を見つめていたんだろう。

練習が終わったあとすぐ、その子が私に話しかけてきた。

「先輩！聞きたいことがあるんですけど・・・。」

「何？」

なんだか嫌な予感がした。

「あの、先輩がさっき言ってた人って武藤さんって言うんですよね。」

「ん、ああ武藤君。そうだけど・・・。それがどうかしたの？」

「いえ、ただ、武藤先輩って彼女とかいるのかなあって。先輩同じクラスなんですよね。そういうの知ってますか？」

ああ、私の馬鹿。どうして彼女に彼の存在をさとらせちゃったの。いかにも男が好きそうな『俺がそばにいて守ってやらなきゃダメなんだ』っておもわせるような、小さくてか弱くて可憐で。

ゆるいカールのかかったフワフワの茶色の髪に黒目がちの大きな瞳に長いまつげ。白い肌。ピンクの頬と唇、華奢な体。自分の魅力を理解していて、最大限に活かしてる。

そんな彼女を拒否できる男なんてそうそういない。

周りは気付かなくても私は彼女のしたたかな女の部分に気が付いていた。

女の敵になりそうな彼女が今まででもめ事を起こさなかったのは、彼女がうまいことふるまってきたからだろう。その陰で何人の男女が

泣かされてきただろう。

部活が一緒なだけのただの後輩が、一瞬にして『女』という生き物になったことを確信した。

「さあ、知らないわね。でもいてもいなくても、もう受験だしきつと恋愛どころじゃないわよ。」

必死に言い繕う自分になんとか笑いそうになった。なんでこんなに必死なんだって。

「・・・そうですか。ありがとうございました。」

部活の休憩中、外に出て暇をつぶしていると、足は勝手に剣道場へ向かっていた。

しかもちようと武藤君が道場からでて裏に向かうのがみえた。思わずつけていくと、道場の裏にある水道の水を頭にかけている武藤君がいた。

「何してるの？」

水を首にあてて体温を下けているのはわかったが、教室では話かけにくかったので何か話すきっかけが欲しかった。

「ああ、高田か。」

彼がびつくりしたように言った。かといっても表情はほとんどかわらず、目を少し見開いただけだが。

それよりも、水に濡れた彼を近くで見て、彼に名前を呼ばれ、かれの視線に射抜かれ、心臓が止まるかと思った。

背中にゾクゾクとした悪寒がはしり、いやに興奮している自分があった。

高揚感というやつだろうか。

「まだ学校クーラーついてないだろ。だから防具着てると熱がこもるんだ。倒れないためにこまめに体温下げる必要があるんだけど、そのために首に水かけてんだ。高田は？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・？・・・高田？」

「ああごめん。武藤君がこんなにしゃべってるの初めてみたもんだから。」

そういうと武藤君はハツとしたような表情をして、両手で顔をおさえズルズルとその場にしゃがみこんでしまった。こころなしか耳が

赤い。

でも私が言ったことは確かで、彼は仲の良い友達と一緒にでも、「ああ。」とか「いや。」とか、多くて一文話す程度なのだ。

「！！！！武藤君！大丈夫？どうしたの？」

いきなりしゃがみこんだ武藤君にびっくりして駆け寄るが、武藤君は「いや、いい。大丈夫だから心配するな。」といい顔をこちらにむけた。

「座れよ。中腰疲れるだろ。」

目で自分の隣を指し示す武藤君の言葉に従い、そろそろと隣に腰をおろす。

彼との距離30センチ。

どうしよう私、心臓破裂して死んじゃったら。

「私は部活の休憩中。外で暇つぶしてたら武藤君が水かぶってるのがみえたから……。」

「高田は吹奏楽だったよな。トランペットだろ。」

「！！・・・よく知ってるね。」

彼が私のことを少しでも知っていてくれてるのはとても嬉しかった。

「あ、ああ。まあな。ほら、あの、最近よく廊下で練習してるだろ。それでだよ。」

「確かに。ここからあそこ見えるもんね。私の所からもこつちよく見えたよ。私、武道とかよくわからないけど、武藤君がすごく強いのは遠目からでもわかったよ。」

「あ、有難う。俺も、ここまでお前の吹いてる音楽聞こえてきたけどさ、その・・・上手いと思うよ。俺みたいな素人がいうのもあれだけさ。」

「クスッ、何この褒めあい。なんか恥ずかしいよ。フフッ。」

それから武藤君と私は、武藤君の後輩と私の後輩が探しに来るまでずっと話をした。

部活の事、受験について、将来の夢、家族のこと、好きなもの嫌いなもの。それに彼のいろんな面を見れたのがうれしかった。楽しい時間はあつという間だった。

「高田!!」

部活に戻ろうと歩きだしたとき、武藤君に後ろから呼び止められた。

「?・・・何?」

「あゝあの、さ。お前さえよければその、なんだ、これから部活の休み時間いろいろ話さないか? あつ、嫌だったら別に全然かまわないんだ。ただいろいろ相談していければ凄くいいんじゃないかと思つて「いいよ。」そうだよな。嫌だよな・・・つて、え?」

「だから、いいよつて。時間もあるし。・・・私も話たいし。」

「ホントに!?!」

「ホントに。こんなことなんかで嘘いわないよ。」

それから彼とは、ほぼ毎日決まった時間に道場裏に集まって2、30分話して解散するというつきあいになった。私と彼だけの秘密の時間。

彼と話している間はとても落ち着いたし、しゃべらない間があっても、とても心地よい無言の空間だった。

教室では特に話さなかったが、ふとした瞬間に目があったりすると優しく笑いかけてくれた。

それから放課後が、部活が、部活の休憩時間がとても待ちどろしく感じられた。

放課後部活に行こうとすると、あの後輩が教室の外にいた。まさかと思った。

だれか探しているようだ。

「あの！武藤先輩。今時間とれますか？」

「・・・少なうとれる。で、それが何？」

「いえ、あの・・・ここでは少し言いにくいことなんで、場所を移しませんか？すぐすみませんで。」

行かないで

「わかった。」

そう言うつと、武藤君は彼女についていつてしまった。
私に引き留める権利なんてないけど、行かせたくなかつた。

気がついたら、彼らにばれないように後ろから追いかけていた。

西階段の踊り場にたどり着くと、彼女はそこで足を止めた。
私は二人にみつからないように、上の階の壁に張り付いて耳をすませた。

「突然すいません。・・・あの、私、武藤先輩が好きです！私と付き合ってくださいませんか！！」

「・・・・・・・・・・ごめん。」

聞こえないように大きく息をはいた。いつの間にか呼吸することさえ忘れていたようだ。

「な、なんですか！・・私じゃだめですか！先輩のタイプの女の子になります！」

「・・・好きな・・・好きながいるんだ。だから君の気持には応えられない。」

「・・・それって・・・誰なのか教えてもらえませんか。」

「・・・それは・・・」

武藤君の答えを聞く前に、駆け出していた。

走って走って走り続けて、過呼吸になるんじゃないかと思うほど走り続けて、屋上に飛び込んだ。

屋上に飛び込んだつもりだったのに気がついたら薄暗い森の中だった。

「・・・・・・・・・・どこよ・・・・・・・・・・」

第一話 気になる貴方（後書き）

別の小説書いてる途中なのに、これも書いてしまいました。
更新はまったりとお待ちください。

第二話 名前を呼んで

「う・・・そ・・・何これ。どこよここ。」

荒い息を整えながらあたりを見回す。

さっきのことが一気に吹き飛ぶようなできごとにはしばらくフリーズしてしまった。

「あつ！そうだ、携帯・・・・・・・・・・ダメ、圏外だ。」

とにかく、なぜこうなったのかとかを考えるのはあとだ。

今はこの森を出て、人に会わなければならぬ。話はそれから。皮袍とサブバックを抱えなおすと適当にまっすぐ歩いて行く。

ここがどこなのか地理的感覚もないし、方位磁石もない。それにここで助けを求めても、きっと誰もこないだろう。それなら自分から行動に移すしかない。

孤独で泣きそうになる自分を叱咤して歩き続ける。

森の中は、屋久島の千年杉のような木々が空に伸び、あまり地面まで光が届かない。

木と表現しているが、今まで見たことがないものだ。幹と呼べる部分も全部緑なのだ。しかも全部同じ種類。

もしかしたら、自分が物凄くちっちゃくなっただんじゃないんだろうかと思う。

でも葉っぱの間から木漏れ日がキラキラしていて、それは綺麗だ。動物にも全く会わない。逆にになに生き物がいてくれた方が落ち着くのに。

腕時計を見ると、五時間近くたっていることに気づいた。

道理で足が痛いはずだ。歩くたびに足の裏が刺されたように痛む。

「足がだるいな。でも、ここで休んだら立ち上がる気がしないよ。」

でも水分補給のために、水筒のお茶を。当分補給のために飴を一つなめながら歩くことにした。

五時間もたてば、だんだん暗くなってきていた。

携帯のライトを使えば見やすいのかもしれないが、なるべく携帯の充電は無駄にしたくない。

どこまでいつても同じ風景。体もまた悲鳴をあげだす。

よろよろと大きな木の根元に座り込む。

「……………無謀だったかも。」

無駄に動いたことに後悔する。

この森が、どんだけ広いのかわからなくせに動いてしまった。

「ハァ、これからどうしよう。人間って、ほんとに悲しい時、苦しい時とかがって泣けないんだな。泣く暇さえ与えられない。とりあえず、気分転換に荷物整理でもするか。でも荷物持ってたのはラッキーかな。」

独り言を言いながら鞆を漁る。

「えっと、皮鞆の中は数学と現社と世界史日本史の教科書にノート。英単語帳に筆箱にメモ帳、電子辞書。サブバックの中はつと、お弁当箱に水筒入ったお茶と昼休み買ったペットボトルの炭酸ジュース。化粧ポーチに鏡。タオルハンカチ。携帯に定期に折り畳み傘。家と自転車の鍵……………後は大量の食べかけたお菓子か。飴に、

ポテチ二袋に板チョコ三枚にソフトキャンディー二つ。他にもあるな。持ってきすぎて重かったけどこれもラッキーね。」

夏用のセーラー服にカーディガンだけの姿だと少し寒い。スポーツタオルを肩にかけ、皮鞆を枕に眠ることにする。

疲れのためか、家族や友達、武藤君のことを考える暇もなく眠りにつけた。

目が覚めても風景は昨日のままだった。

「・・・ホントやだ。」

筋肉痛とたるさでボロボロの体を引きずりながら歩き出す。

そんなことを八回くらい繰り返した。

お菓子も、飲み物もとつくに底をついていた。

「・・・ハア・・・ハア・・・お風呂・・・入りたい・・・」

朦朧とした意識の中でそう思った。
それから先は覚えてない。

気がついたら変な化け物みたいな奴らに囲まれていた。

「いやあああああああ——！！！！！！！！」

疲れた体に鞭を打って走ろうとするが、足がガクガクして逃げられない。

ファンタジーの世界から抜け出てきたような奴らに迫られ、とらえられる。

何かしゃべっているがわからない。

私終わった。

その中の全身緑色の肌をした大男？のような人に担がれ恐竜のような生き物に乗せられる。

暴れまくるが全く歯が立たない。

「いやいやいやあー！！！！放してよー！！！」

恐竜が走り出すと揺れがひどくて、暴れたままだと男の腕から落ちそうになる。

大人しくするしかない。

唇をぎゅっとかみしめ恐怖に耐えた。ひとりぼっちの孤独も嫌だったが、これもかなり嫌だ。

緑男の顔を見ていると、それに気づいたのか男が不思議そうな顔をしてきた。

「・・・これから私をどうするつもり？」

男に聞いてみるが、返ってきた言葉はまったく聞いたことのないものだ。

特殊メイクか何かだと思っていたが、どうやらもとから緑の肌らしい。

他の人？たちも少しだけ見えたが、二足歩行の狼のような奴が中世やファンタジーの住人のような服をきていたりする。

ここは地球でさえないのかもしれない。

そう思うと、自分のおかれた状況と森の中一人耐えた恐怖を思い出し、ここに来てから初めて泣いた。

「ううゝヒック、ヒック・・・お母さんお父さん助けに来てよゝゝヒック・・・ううう、武藤君こわいよゝゝ私一人ぼっちだよゝヒックヒックうゝ・・・」

急に泣き出した私にびっくりしたのか、緑の男は私の後ろで慌てているようだ。

それに気づいた他な奴らが、恐竜を止めギャーギャーしゃべり始め

た。

どうやら緑の男に対して怒っているようだ。

「へ、何？仲間割れ？」

後ろを振り返ると、オロオロとして慌てている緑男と目があつた。すると男はそろそろと私の頭に手を伸ばして、いーこいーことナデナデしてきたのだ。

びつくりしすぎてポカーンとしてしまった。

意外過ぎて涙も引っ込んだ。

この人たち、見かけはモンスターみたいだけどほんとにはやさしいんじゃないかと思った。

私を助けてくれたんじゃないかって。

「私の名前は高田優子。わかる？優子。た・か・だ・ゆ・う・こ」

自分を指さして言う。

「タカ・・・タユ・・・」

「そう！そう！ユーコ。言ってみて。ユーコ。」

「ユーコ」

「そう！あなたの名前は？」

今度は緑男を指さして言う。

「ラグ。ラーグ。ラグ」

彼は自分を指さしてラグといった。

「らぐ？」

「ラグ」

「ラグ」

私がそう言つと彼は嬉しそうに笑つた。
私もつられて笑つた。

自分名前を呼ばれるのがこんなに嬉しいことだとは思わなかった。
嬉しすぎて、また涙が出てきた。
泣いた私にまたオロオロしだすラグは私が泣いたせいでまた周りから責められてた。

それが面白くて、泣きながら笑つた。

第二話 名前を呼んで（後書き）

あけましておめでとー！！ねーますー！！

第三話 お城にて

恐竜に揺られ森を抜けると、一面人工的な畑が広がってきた。その向こうに大きな西洋系の城がある。

城は大きな城壁にかこまれていて、石の関係だろうか城は全体的に黒っぽい。

恐らく、城壁内は城下町が広がっているのだろう。

「城に向かっているのね。」

しばらく恐竜に揺られていると巨大な門の前についた。門の前には猿に似た動物の顔の人と、爬虫類のような顔の人が甲冑をきて警備をしていた。

私たちが目の前に来ると、片ひざを立てて挨拶した。これは敬礼のようなものなんだろう。

そのうちのサル顔の人にラグが何か板のようなものを見せると、どろどろというように門の横にある小さい扉から通してくれた。

中はやっぱり町になっていておとぎ話のモンスターたちが大集合という感じだった。

でもやっていることは人間と何ら変わらない。子供は元気に走り回り、大人たちも忙しそうに働いている。

そう言えば、外の畑でもたくさんの人たちが働いていた。

街並みも西洋風だ。でも素材が黒いものが多く使われているためと町の人たちの姿とで、かなり怖いというかダークな雰囲気だ。

しばらく進むと町の中心地に来たのだろう。ものすごくにぎやかなのが遠目でもわかる。

市場を開いてるようだ。中東あたりのバザールに似ている。

売ってるものは様々だが、正直食べ物結構グロテスクな見た目を

していてギョツとした。それに自分たちの顔に似ているのに、この人たちよく食べれるな。

ここで暮らすならあれを食べなくちゃいけないに、大丈夫か私。

市場を恐竜に乗ったまま突き抜けるのはかなり邪魔になっている。

それでも時間をゆっくりかけて市場を出る。

市場を抜けると少し閑静な、高級感がでている町並みに入る。

そこを通ると、城門が張り巡らされた一帯に出る。城下町を囲う門と、城を囲う門の二重構造のようだ。

門の周りは水が張られたお堀がある。そこに一本の橋がかかっており、城壁の門へと続いている。

そこにまた、二人の警備兵？が立っている。

その二人の前までつくと、さっきの門でもやったようにラグが板のようなものを見せ、それを見た二人は片ひざをたてひざまづく。

もしかしてラグ達って偉い？

城内はゴシック的な雰囲気醸し出している。

魔王城みたい。

そのままあれよあれよというままに、ある一室につれてこられた。

執務室のようなところだ。

中には何人かが働いていたが、私たちが中に入るとヤギ頭の人近づいてきた。

ラグとヤギ頭何か話している。そのあとヤギ頭は私を上から下までジーっと見ると、ついてこいというように顎をクイッとしゃくる。

不安になってラグを見上げるが、大丈夫だというように微笑んで背中をポンっとかるく押された。

ラグが何か手配してくれたのなら心配はないんだろう。
決心してコクンとうなずくとヤギ頭についてゆく。

廊下を進んでいくと、また部屋に連れて行かれた。部屋にはお揃いのメイド服のようなユニフォームに身を包んだ女性たちが大勢いた。何人かは女性かどうかわからなかったけど・・・。

ヤギさんが中に入るとすぐに、まっ白い肌に真っ赤な髪以外は普通に人間に見えるお色気美人さんがやってきた。

また二人が話しはじめ、美人さんが私の周りをグルッと見て回る。少し緊張してピンと背筋を伸ばすと、美人さんはほほ笑みヤギさんにまた話し始めた。

話が終わるとヤギさんはいき、美人さんは私に向き直ると話し始めた。だけど言葉はわからないから困った顔をしていると、美人さんは少し思案した後自分を指さしてギルバーダといった。だけどギルとも言っているの、そう呼べということだろう。私も自分を指さしてユーコだと伝えた。

美人さんにその女性たちと同じ服を着させられた。

これはもしかしくなくても、この城でメイドさんのことをしるということなのだろうか。

着替えた後はまた移動で、城内を抜けて宿舎のようなところに来た。ギルが扉をノックすると、ワニのような頭をした人が出てきた。私にびっくりして固まったのを、不思議そうな顔をして見られた。

中に入れられると、十畳ほどの広さの部屋に二段ベットが二つ、その奥に小さな机とイスが二つ。そして大きなタンスが壁にブラツと並んでいた。

すでに三人住んでいるらしく、さっきのワニ顔の子と猫のような耳の付いたかわいい女の子、ラグのような緑の肌を持った女の子の三

人だ。みんな私とおそろいの服を着ている。

どうやらギルが三人に自分を紹介しているようだ。ところどころニコと自分の名前が聞こえる。

三人は私に向かってそれぞれ自己紹介をしはじめた。あらかじめギルから私が言葉をわからないことを聞かされていたのか、自分を指さして短く自分の名前だけを告げてきた。

上からガルサ、ルーベル、シェイラーというらしい。

私も通じないとわかっていながらも日本語であいさつすることにした。

「はじめまして、高田優子と申します。ご迷惑をお掛けすると思いますがよろしく願います。」

そう言ってぺこりと頭を下げる。

そうすると彼女たちは、ニコニコ笑い私に色々話しかけてきた。

どうやら私は受け入れてもらえたらしい。

第四話 アーシャルバー代理

「ユーコ!!! 終わった? お昼御飯にしましょ。」

「もうそんな時間? あとちよつとで終わるから待つて。」

私がこの世界にきて、ほぼ一年近くたった。ここはヴィーリングルト国の首都クロウイグ。

言葉は、相撲部屋の力士が完璧な日本語を話すのと同じように、必要に迫られることと、その言語にどっぷりつかることによって日常会話に困らない程度話せるようになった。

ホームシックで毎晩泣いてた私をやさしく慰めてくれたのは相部屋の三人だった。事あるごとにものを指さして固有名詞を聞いたりする私に、三人は根気強く付き合って文字も教えてくれた。

こちらに持ってきた勉強のノートを途中から単語と文法、この常識を書きとめるためのモノにかえた。

言葉がわかるようになると、色んなことがわかるようになる。そしてわかったことは、ここでの私の仕事は給仕担当のメイドだということ。この世界は意外にも民主制で、トップのアーシャルバー（大統領や首相のようなもの）は良い政治をしていれば選ばれてから死ぬまで王様のような暮らしをおくれるが、国民が許せないほどの政治的失敗または独裁をした場合は国民投票や意見交換により処罰が下される。ほかの役職も投票によって決められる。

因みに、ラグは神武官長補佐という役職で結構偉い。神武官とは、この国の神様であるバルーダを祭る神官であり神殿直属の兵士のことだ。

ラグに何故私を助けたのか聞くと、クリンの森の入口で遊んでいた子供が誰か倒れているということで、地方神殿を視察した帰りのラ

グたちに知らせたらしい。そこで倒れてたのが私で、見たことない民族だったけど、ボロボロで可哀そうだということで連れて帰ってくれたらしい。

またギルはメイド長だ。しかもギルは日本の歴で数えると、250才というつわものだ。

あんなに美人なのに。

ここの食べ物にも苦労した。味は大丈夫なのだが、いかせん見た目が怖い。体も慣れなくて、お腹を壊したりもした。

唯一のすくいは水が地球と変わらないこと。

でも重力も少し地球より弱いらしく、私はここでは力持ちだ。場所によっては、物凄く酸素が多くて呼吸しやすいところもあるが、少ないところもありそこでは窒息死に気をつけなければならない。

「ねえユーコ聞いた？ヘイロネア国がまたなんかやらかしてきそうだって噂よ。」

「ヘイロネアが？確か昔もあそこはいろいろ仕掛けてきたのよね。」

「そうなの！！私たちを卑しい化けものだって！悪の国だとかいっていつつも攻め込んでくるの。自分たちは正義で美しく賢いのだとか何とか言っちゃうのよ。笑えるわ。姿かたちの違う私たちを排斥して領土を広げたいだけなの！！」

食堂でルーベルとビスルというパンに似たものを食べながら話す。ルーベルは興奮しているのか猫に似た尻尾をシャーっとけば立たせている。・・・可愛い。モテるはずだ。灰色の髪が魅力的だわ。

「聞いているの？ユーコ！！」

「聞いているよ。」

ヘイロネアという国の人にはあったことはないが、私と似ているらしい。

また、自分たちと姿かたちの違う人々を差別しており、自分たちが至高の存在であると信じて疑わないらしい。

「戦争になるのかしら？私の国は戦争のない国だったから不安だわ。」

「んゝ過去に何度も戦ってるからね。しかも勝敗は五分五分。私たちはここでゆっくり過ごしていただけなのに、彼らの国の邪魔もするつもりもないのになんで毎回毎回ちよっかい出すかしら。」

「もしそうなら俺たちが守ってやるからだ丈夫だ。安心しな。」

訓練が終わった豚っぱい頭の兵士さんが話に割り込んできた。

「じゃー任せたわよ兵隊さん。」

「ルーベルちゃんに言われたんじゃ頑張るしかないってもんよ。それより、美人と可愛い子が二人並ぶと壮観だねえ！！」

「おだてても何も出ないわよ。でも褒めてくれて有難う。」

私がそう言つと兵隊さんはデレデレした顔をしながら去つて行つた。黒豚系のひとだったから顔の赤さとかはわからなかったけど、あれは絶対照れてた。

「もう！ユーコはホント罪作りね。」

「・・・ねえ、ルー。さっきの人の言葉の中でわからない単語があったんだけど。ほめてくれてたのは雰囲気であつたわ。」

「何がわからなかった？」

「サグ、サグラベ？だったかな。ええつとそんな感じの・・・」

「ああ！！サグリーブね。サグリーブ。意味はね・・・ん、凄い景色みたいな時に使うかな。」

「サ・グ・リー・ブ。凄い景色などを見たときに使用つと。よし！メモった。ありがとね。」

ポケットからメモ用紙を出して、ルーベルが教えてくれた意味を書きとる。こうしないと忘れてしまうからだ。特に名詞ならわかりやすいが、形容詞や助詞副詞などはなんと言っているのか理解するのがかなり難しい。

食堂で遅めの食事をすますと、午後の仕事に戻る。給仕といつても様々な雑用をしないといけないのだ。

毎日一生懸命働いて、仲間とおしゃべりして泥のように眠る日々を繰り返した。

最近では、家族の顔さえ思い出せそうにない。

忘れたくないのに忘れてしまう。それが何より怖かった。夜の眠る前や一人になると、向こうの世界のことを思い返してしまうので、わざと必死に働いて体を疲れさせて眠りについた。

神殿の鐘が物凄い勢いで鳴り続ける。

ヘイロネア軍が、後1日ほどでこちらにつくらしい。城の中ではみんな慌ただしく走り回っている。

「どういうことだ！！城に向かっているだと！！しかもあと一日ほどで着くだなんて！！」

牛頭のザーナ將軍が焦ったように机を叩く。会議室の中は重い空気に包まれていた。

「奴ら、こちらの食料が尽きるまで待つつもりですよ。長期戦のため、しこたま食料と武器を持ってきたらしいとの報告です。」

アーシャルバー、ご決断を。」

みんなの視線が年老いた犬顔のアーシャルバーへと向かう。
彼は国民にやさしい政治を行うとして選ばれたが、戦ではその優しさは仇となる。

「・・・・・・・・・・今まで幾度となくヘイロネアとは剣を交えてきた。多くの者たちを失った。家族、友人と愛する者たちをな。わたしはもう誰も失いたくないのだ。だから戦は避けたい。それに兵が足らん。」

「ではいかなさるおつもりで・・・・。」

「城に籠り、被害を最小限におさえよう。城壁がある程度は守ってくれよう。」

「ですが、それでは長い時間もちません。奴らは長期戦のつもりです。我々には不利です。」

私は会議室で、幹部たちの話を聞きながら水を給仕しまわった。
こういう場合って歴史の知識とか役に立たないかしら。何かあったかな。

「あのお、少しよろしいでしょうか？」

「なんだ！！今は勝つか負けるか、生きるか死ぬかがかかってるんだぞ！！」

「城に籠ってしまうということは、城を囲まれるということですよ。ね。そう言う場合は、ええっと防御設備、備蓄物資とか？をして、

士気が高く適切な数の兵を有すれば、大軍をもつてしても陥落させるのは非常に困難だ。というのを聞いたことがあります。」

「そんなことはわかっている！！給仕の使用人である戦の素人が口出しするな！！」

「今まで・・・えっとなんて言うんだろ。お城に籠って戦うことなんですけど・・・。」

「ええい！そんな言葉はない！！それよりさっきからお前はなんなのだ！出てゆけ！！」

どうやら籠城という概念はまだないらしい。しかも將軍に思いつきり怒鳴られる。

「お待ちを、將軍。話を聞くくらいよろしいでしょう。・・・お前、何か策でもあると？」

宰相に近い役割の、ムーバミンさんがはなしかけてくる。

「そういうのを私の国では『籠城』っていうんですけど、今までその経験は？」

「我が国建国の歴史の中では一度もない。ここまで奴らが攻めてくるのは初めてだ。今までは別の場所で戦ってきたが、それがどうした。」

「少しお待ちください！！」

そう言うで一礼して、廊下へ飛び出る。向かうのは自分の部屋。

確か日本史のノートに、時と場所と場合に応じた色んな戦法を書いていたはず。その中に籠城についても載ってたと思う。過去の戦争内容や、執政についても細かく書いた記憶がある。

日本史の先生が戦法オタクで授業に関係ないが教えていて、軍事史好き仲間とウイキペディアにも書き込んだりしているらしい。てか、あの人たちがほとんど書き込んでるんじゃないだろうか。一回見てみたけど、授業で喋ってたこととおんなじこと書いてたし・・・。自分としても面白かったのでノートに作っていたメモ欄に、全部書き込んでいたのだ。それがこんな所で役立とうとは思わなかったが。

「ハアハアハア・・・日本史ノート。机の中に・・・あつた！！でもこの世界で通用するのかしら。」

とにかくやってみなければわからない。ノートの中身を確認して、籠城について書いたページを探す。

籠城の文字を見つけると、また会議室へと走り出す。

「ハアハアハアハア・・・遅そく・・・なつて・・・すみま・・・ハア・・・せ・・・ん。」

会議室につくと、説明のため荒い息を整える。給仕の友達が、水をコップに注いでくれた。

それにお礼をいって、渴いた喉を潤した。

「で策はなんだ？そんなものあるのか？」

将軍が息を荒げながら聞いてくる。

「あの、その、籠城戦を行う場合は・・・えっと・・・まず、自分たちの状況を知るために得になること損になることを説明します。」

籠城して私たちあるメリットは・・・」

「待て、『めりつ』とはなんだ？」

宰相が不思議な顔で聞いてくる。

私は会議室の円形テーブルに近づくと大きめの声でノートの内容を翻訳しながら話した。

「メリットとは得することという意味です。話の続きですが、我々の籠城による徳は、立てこもる城の構造や兵の士気にもありますが、守る側・・・守備側ですね。守備側は攻撃側の数分の一の兵力でも拮抗できるため、極端な兵力差がある場合や支城などで相手側を足止めする必要がある場合には有効だということです。また、長期戦になった場合には多勢である攻撃側の兵站確保が困難となり、撤退、事実上の敗戦ですね。それに追い込まれる場合もあります。」

「大体予測できる程度だな。」

「最後まで一応聞いてください將軍。」

「な、何だと！！私は將軍だぞ！仮にも軍を預かっている私に向ってなんてことを！！」

この人頑固すぎる。頭が固いというのか。話ぐらい最後まで大人しく聞いてくれ。

「ハア。。。続けても？」

宰相に伺うとウンとうなずいて、「気にせず続けなさい。」と言われた。

將軍がまだ何か言っているが、この際無視だ。

「我々にとって損なことは、ええつと・・・数ヶ月、数年にわたる長期間の兵糧攻めを受けた場合には物資の・・・足りなくなること・・・んゝ欠乏だ！物資の欠乏や・・・飢え？あつ！飢餓か・・・飢餓に陥り、城主の自決による開城などの結末を迎える場合も過去の戦では多かったそうです。こうした場合を想定して、城には深井戸や食糧となる樹木を植え、籠城を意識した構造を採っているものも珍しくなかった、ともありますね。そういうものは・・・ありませんよね。籠城初めてだし。」

「いくつか果実や木の実が生る植物などは植えられているが・・・それだけでは城下町の民たちを城にかくまったら足りんだろうな。」

宰相が困ったように言う。

「それが全てではありません、宰相様。気を落とさずに。続きはつと・・・また、攻撃側によって包囲されている関係上、包囲の外との連絡が取り難くいため、援軍と呼応しての反撃は受動的にならざるを得ません。しかも、攻撃側が守備側を包囲してなお侵攻に必要な兵力を残していた場合、籠城する戦力は遊兵と化す恐れがあります。・・・我が国に、同盟関係や友好関係にある国は？」

「何力国があるにはあるが、他国の戦争に関わると自国の危機にもつながる可能性があるからなの。・・・はたして援軍として来てくれるだろうか。」

アーシャルバーがうつむき加減でつぶやく。他の役職の幹部たちもそれにつられるように頭をうつ向かせる。

「やってみないとわかりません。とにかく使者を派遣しましょう。援軍がだめなら物資の支援をしてくれるように頼みましょう。秘密のトンネルを掘ってそこから運び込んで耐えましょう。」

「こんな小娘の言うことをお聞きなさるおつもりですかアーシャルバー！！立て籠もるなど、生易しい気持ちではいけません！！」

將軍がそう言うのに続いて、他の幹部たちもそうだと続く。

「一つの国といっても広いのだぞ。我々の考えが足らなかったミスで、まだ召集はしておらんから各村や町に連絡を回して男たちを集めるだけで最低1週間はかかるぞ。後一日で敵軍がこちらに付くというのに無理なはなしだ。首都の男たちだけでは対抗するのに少なすぎる。」

宰相が悔しそうに言うと、誰もが口を閉じた。

「籠るしかないと？」

「の、ようだな。・・・娘、どうしたらよいのだ。」

「はい。まずはなにより準備からです。食料、水、武器、消耗品その他の必需品を十分備蓄する。それから・・・城壁など城の修繕、強化する。そのための材料確保も。その材料が確保できたら、周辺の木々などを伐採し、敵軍に対して破城槌や燃料に使える木材などの確保を困難にさせる。防御するのに必要、十分な守備兵を集める。これはどうしようもないので仕方がないですね。主君や友好国に援軍を要請する。これも使者の方に頑張っていたいただきましょう。」

「わかった。手配させよう。」

アーシャルバーが大きくうなずいてくれた。

「………具体的にはどういう戦い方をすればいい？」

意外にも將軍が話しかけてきた。

「その前に一つ。ヘイロネアは過去に他国対して城まで攻めに来たことは？」

「いや、普通戦というのは宣戦布告をして、どこの国にも属していないような場所で行う。この世界でこんな戦は初めてだ。……奴ら、我々を滅ぼすために当り前の戦争の礼儀さへ無視したようだ。我々が奴らに何をしたというのか、姿形が違っただけだというのに……。」

將軍は忌々しげにつぶやくとまた机をたたいた。

「それなら前もって準備していたのでしょね。私の国とは違う攻め方で来るかもしれませんが、彼らも城をおとすのは初めてでしょう。慣れていないのでこちらにも勝機があります。攻撃には……ええと火をつけた……こう細い棒の先に切れるものをつけて、糸の付いた反り返った棒の力でビューンと飛ばす兵器の名前……。」

専門用語は名前がわからなくて困る。

「矢のことか？糸の付いた棒は弓だ。」

「それをそう言うのですか。その矢に火をつけたものをうたれれば

消火し、城壁が破損すれば臨時の補修や衝撃を弱めるための緩衝材となるものを設置する。敵が接近してくれば、矢、石弓、あゝ・・・石を投げる機械などで攻撃し、ええ？これなんていうのよ・・・城壁に兵士を送り込んだり、城壁の上から攻撃できるようにした移動できるやぐらが接近してくれば、その破壊を試み、城壁をよじ登ってくれば、石や材木、高温の液体などを上から落とす。トンネルに対しては、城側からもトンネルを掘り、敵を追い払って埋め戻す。城内の構造を複雑にし、武者隠しや落とし穴などを設置して、侵入した敵を畏にはめる。・・・これは城の構造自体かえなきゃならないから戦争のあとにでも考えましよう。えゝとそれから・・・城壁などを多層化し、外周の城壁や城門が突破されても内壁などによって・・・本丸ってなんていうのかしら・・・中枢？への敵軍の進入を防ぐ。これも今後の課題ですね。他は・・・なにになに・・・唯一能動的な戦法は、城から小部隊が突撃する・・・突然攻撃にくるって単語なんだっけ・・・あつ！思い出した！・・・奇襲、夜襲で、これは相手の隙を突いて城側が場所と時間を選ぶことができるため有効だ。小部隊のため敵に与える損害は限られており、戦局には大きな影響は及ぼさないが、攻城側に恐怖心を与え城側の士気を上げるのに役立ち、長期の籠城には欠かせなかった。しかし、突撃部隊が帰還する時に攻城側に付け入られる危険性がある。以上です！！」

何とか翻訳し終わる。いっぱいいっぱいだったから、ちゃんと伝わっただろうか心配だ。

「テイラスラ書記官。ちゃんと書きとめたか？」

「はい、アーシャルバー。」

「うむ。よろしい。・・・ところで、娘。そなた名はなんと申す。」

アーシャルバーに名前を聞かれ、この国の最大の敬意の示し方である、片ひざをたてて名乗る。

「アーシャルバー、私の名前はユーコ。ユーコ・タカダと申します。」

「そうか、ユーコというのか。お前は異国人だったな。そのような知識はどこで？」

「我らが世界には、子どもたちは学ぶ権利と義務がございます。そのため、学問など様々なことを同じ年頃の者たちと共に学ぶところがございます。こちらで言う、グラダスのようなものです。全国民の子供たちがその教育機関に入る必要があるということ。グラダスとは違いますが。そこで学びました。」

「・・・なるほど。お前には学があるのだな・・・お前は私などより知識もあり、先ほどのやり取りからどうやら指導力も決断力もあるようだな・・・」

そういうとアーシャルバーは黙り込んで思案しはじめた。そして会議室にいるみんなに、これは決定事項だとも言つようにきっぱりと宣言した。

「ユーコ・タカダに、私アーシャルバーは全権限をゆだねることにする！この戦の間は、ユーコの命は絶対だ。私の命だと思え！・・・ユーコよ、お前をアーシャルバー代理とする。心して臨め。」

会議室がいつせいにシーンとなると、次々と反対意見が飛び交いだ

した。

私自身もびっくりしすぎて動けなかった。

「アーシャルバー！何を酔狂なことを！自分が何を言っているのかわかっておいでですか？」

「ああ、もちろんわかっていても。だがな、皆よく考えてみてくれ。我らのように、このような戦いの知識がないものが指揮をとるよりも、ユーゴのように知識があるものが指揮をとった方がよいに決まっておるう？あのものは先ほどの確かな判断を下し、我らの持たぬ知識をも披露した。これほどの適任はおるまい・・・」

「ですが・・・そうです！このものからあらかじめ戦についての知識を得ればよいのです。」

「それは戦のあとじゃ。戦とは生き物だ。どんなことがきつかけで戦況かわるかわからん。そんな時に、このものから得た知識をまとめた紙とにらめっこするつもりか？瞬時の判断が大切なのに？」

アーシャルバーのこの一言で、みんな黙ってしまった。反論の余地がないのだ。

アーシャルバーはぐるっと会議室のメンバーの顔を見回しながら言った。

「よし、これで決まりだな。」

「いはいはいはい！！！！ちょっと待って下さい！勝手に決めないでください！！私には無理です！！」

「もう決まったことだ。この国を守るのにはお前の知識が必要だ。

私も、もちろんここににいる者たちもお前を支える。何も一人で何でもかんでも考えて決めるといつているわけではない。お前の力を借りたいだけだ。」

ここでなんとか拒否しないと、ヒトの命が私の一言で左右されてしまう。そんなこと、一年前まで高校生だった私には無理だ。

「ですが、私には無理です。人の上に立つ仕事もほとんど体験したことがありませんし・・・なにより、人の生き死に実際関わったことのない私は恐ろしくて仕方ないのです。自分の判断で何人殺すかわからない・・・私にとっても戦争は紙の上のお話なんです・・・」

「・・・確かにお前の言うとおりだな・・・私個人としてはお前のような娘にこのようにキツイ判断をさせる仕事に就かせるのは絶対に反対だ。だが私はヴィーリングルト国アーシャルバーだ。お前個人よりも多くの国民のためにうごく。これは命令だユーコよ。アーシャルバー代理となれ。」

「・・・はい。ご命令承ります。」

国のトップにお願いではなく命令されてそれを実行しなければ反逆となると私はこの国で生きていけなくなる。

この命令を受けるしか私にはなかったのである。

第五話 使者

「どうということだ!!! 今までのヘイロネア兵の剣術は我々と同じようなものだったのに!!! 今まで見たことのない動きをしているぞ!!! どうするのだ娘!!!」

殺しなんて嫌だと甘っちょろい気持ちだと自分たちがやられてしまう。そんな光景を私は見ていた。戦況が見える比較的安全な部屋にいるが、遠目からでも一人一人の顔まではつきりと見える。

血が飛び散ったりするようなグロテスクなものは本来平気だから問題ないが、目の前で敵味方関係なしに死んでいくのはショックだ。だけど私はアーシャルバー代理だ。この国の命運を任されている。

敵にも大切なものたちがいるように、私たちにも大切なものがある。それを守らなければならない。

敵は殺す気で来ているのに、戦争は嫌だなんて言ってられない。それ以前に、命の防衛本能が働く。

「黙れ將軍!!! 苦境に入った時ほど冷静でなければ判断を誤る。・あの動き、どこかで見たことがある。それに、私の国と違う攻め方もあると思っていましたが、私の知っている攻撃ばかりだわ。」

自分に言い聞かせるような口調で言い、頭を落ち着かせた。

「何!?! ではどうするつもりだ!!!」

「その前に將軍、言葉を改めてもらいましょう。私はアーシャルバー代理。すなわちアーシャルバーと同等の権限を持っているものです。ということはどうということかわかりますよね、將軍より立場は上です。」

「こ、小娘ごときが私になんて口を！！！」

「何度言わせるつもりですかザナ將軍。口のきき方には気をつけなさい。・・・それに今はもめている場合ではありません。將軍、貴方ならわかるでしょう。將軍の貴方が代理の私を敬わずに、どうして兵がついてきましようか。貴方のおっしゃる通り、一給仕使用人ごときがアーシャルバー代理に急になったからと言って、私を信じて付いてきてくれる者は皆無に等しいでしょう。この戦時下、兵の心が割れることは負けを意味します。・・・わかってくださいますよね。」

將軍の目を見て問いかける。

將軍はいわゆる単純明快な一直線攻撃型で、情にもろく、熱血野郎でちょっと頭が残念。だけど単純な分丸めこみやすい。つまりは扱いやすいということだ。だが兵の士気を盛り上げたりするのが上手で、突撃の時などはあまりの恐ろしさに敵は逃げ出すこともあるというほどの扇動能力を持っている。

そこをうまくこと利用すれば、何とか勝てるかもしれない。なにせこちらは圧倒的に不利なんだ。

因みにこの情報源は宰相さんだ。

「・・・お前はそんなことまで考えていたのか。・・・今までのご無礼を許してほしいユーコ殿。私にできることなら何でもしよう。

何なりとご命令を。」

感極まったように將軍は言う、私の前にひざまづいた。

ホントに単純すぎる。百万の布団騙されて買っても、アレは騙されたんじゃなくて欲しかったから買ったんだ。あいつは人をだませるような奴じゃないって、ちょっと優しくされただけで詐欺師をかば

うタイプだ。今時の日本じゃ絶滅危惧種だわ。

窓の外を覗きながら私は考えていた。こちらの世界は、兵士はたくさん訓練はするが剣技を追及するという概念はないらしく、試合などは唯の棒ふり合戦のような感じだ。力かスピード勝負で技術はそんなに高くない。お互い今までそうだったらしいが、ヘイロネア兵一人一人がとてつもなく強くなっているらしい。

先ほどから幾度となく城下町の中にはいられそうになっているが、準備のおかげで何とかなっている。向こうもこんなに長引くとは予想外のようなだ。

でも一、二人のヘイロネア兵に城壁にのぼられると、私たちの兵士四、五人でかからないと太刀打ちできない。

戦った兵からの報告によると、よくわからないが翻弄されっぱなしで多勢で一気にかからないと敵わなかったほどらしい。しかも剣の形が変わっていたとも言っていた。細いのに折れないと。敵から取り上げたその剣を持つてくるように頼んでおいた。もうそろそろ来るころだろう。

いつ城壁を越されるかと冷や冷やしながらも、ヘイロネア兵が城壁にたどり着いて私たちの兵と戦う様子を見ると、どこかで見たことがある動きなのだ。

「あの立ち方どこかで・・・いやまさか、そんなはずは・・・ありえない」

「失礼しますユーコ様！！敵兵から没収した剣をお持ちいたしました！！どうぞ。」

「ありがとう。」

兵士にお礼を言って、布に巻かれた剣を見てみると言葉を失った。
なぜありえないと言い切れるだろうか。

私がここにいるように、同じく飛ばされた人間がいてもおかしくないというのに。

剣は日本刀だった。どこからどう見てもだ。恐らく、日本刀や戦争に関する知識と、武術を習得している者が私のように飛ばされてきた。かなり日本人の可能性が高い。

しかも、ヘイロネアがこの戦争をしかけてきた原因の一つかもしれない。少なくともここ2、3年以内の最近にその人が飛ばされてきてヘイロネア国の中枢に関わり、兵士たちを鍛えたのだろうか。

その技術をこの短期間である程度ものにさせることができた。だからヘイロネアは宣戦布告もなしに徹底的につぶしかかってきたのだろうか。国力が五分五分だった前とは違い、今はその人がいるおかげで勝利を確信した。なによりヘイロネアは自分大好きなお国柄らしいし、野望もある。

中枢である首都をつぶしてしまえばこの国は簡単に手に入る。

いや、憶測で物事を進めるのは危ない。……でも私の考えが正しかったら？

「その貴方！すぐにアーシャルバーと各大臣をこの部屋に呼んでください。」

「はっ！！」

一礼して部屋を出ていく兵士を見送り、ノート片手にこれからどう反撃に出るかを考えた。

兵糧攻めを長期間続けられたら分が悪い。しかも向こうも長期戦がこちらにとって不利なことがわかっているので、五万近くの大軍を率いてるのに一気にかかってこず、五千ほどの兵をけしかけてきてちよこちよこと損失をあたえてくる。

恐らく、チームに分けて順番に攻撃することによって兵士を疲れさせないで、なお且つこちらの気を散らすつもりなのだろう。

急に扉がひらくと、ゾロゾロ連れだっておえらいさんたちがやってきた。

「本当はこちらから伺わなければなりません、今回はご勘弁を。実はヘイロネアに使者を遣わそうと考えています。いかがお思いになられますか？」

「なんですと！？それは危険だ。使者は生きて帰ってはこれぬだろう。」

国土大臣が反対の意見を唱える。だが、それくらい私もわかってい

る。
「和議という可能性にもかけたいのです。・・・かなり低い確率でしょうが。ヘイロネアに派遣することが無理なら、ヘイロネア軍の一番偉い方と話ができればいいです。」

アーシャルバーと大臣たちはひとしきり話し合つと、私に向って訪ねてきた。

「可能性があるならそれにもかけたい？」

「はい。受け入れられればそれはそれで終わりですが、この和議が受け入れられない場合のこともちろん考えております。」

「受け入れられなかった場合の作戦とは？」

「ゲリラ戦を決行するつもりです。具体的には、敵の補給路や通信網の遮断、妨害などを行い敵を孤立させるつもりです。そのために今、地下トンネルを男以外の女子供にも手伝ってもらっていることは知っていますよね。向こうも長期戦のつもりでしょうが、こちらもそのつもりです。きっと予想以上の長期戦になった場合、応援を呼ぶはずですよ。それをゲリラ戦によって阻止します。もし食糧支援などの場合はこちらがそれを頂けばよろしいです。兵たちから不満でも出れば撤退するしかないでしょう。」

この世界の戦争は、大体一日二日で終わる。長期戦といっても数週間分の生活用品しか持ってきていないという情報だ。こちらは三か月は耐えられるほどの食料等を持っている。しかも城下町の外に広がっていた畑は、こちらにも痛手だが焼き払った。やはり生きているものは空腹には耐えられないだろう。

奇襲も考えていたのに、交替で襲ってくる兵士のせいでこちら側にはそれを行う元気もなし、決行する隙もない。きっと交替で休ませずに襲ってくるだろう。

とにかくトンネルが出来ない限り、こちらは防御に回り続けるしかない。

幸いにも、向こうにはトンネルを掘るという考えはないようだ。

「・・・何人が集めよう。その代り立候補制ということで。立候補するものがいなければこの話は無しだ。良いな、ユーコ。」

「御意。アーシャルバー。」

「これは希望制です。やりたくなければやらなくて結構です。ヘイロネア軍に和議の申し出をするために、使者を遣わすつもりです。」

私の一言に、この部屋に呼ばれた男たちの周りの空気が凍った。

「……誰か死ぬ覚悟で行ってくれるものはいないだろうか。こちらにもなるべくその方のために、安全確保をするつもりです。」

しばらくみんなが黙ったままだいると、一人の鳥頭が私の前に進み出た。

「その役目、私にやらせてはいただけませんか。他の者には家族がありますが、私は三年ほど前に母を亡くしてから天涯孤独でございます。恋人もおりません。友人たちはみな心配してくれるでしょうが、他の者たちに比べると死ねない理由が少ないのです。それにこの国を守るために死ぬのであれば本望です。」

「ほんとによいのですか？後悔していませんか？死ぬかもしれないですよ？」

「一度決めたことを取り下げるつもりはありません。」

私の目をみてしっかりとした口調で答えた彼にゆっくりとうなずく。

「あなたの名前は？」

「コルトでございます。」

「アーシャルバー代理の命により、コルトをヘイロネア軍への使者に任命する。・・・必ず生きて帰れるように努力します。」

はじめはみんなに聞こえるように大声で、後半はコルトにだけ聞こえるほどの大きさを宣言をした。

すぐさまコルトに準備に移るように命じる。

そして何本かの矢を、攻撃が止まっているわずかな間に敵の本陣に矢文として放った。

「よし、受け取ったのね。」

「はい。最初は攻撃と勘違いしたようですが、矢に付けられた紙に気づきそれを上官と思われるものにすぐさま見せにきました。」

矢文に書いた内容は要約するところだ。

我々には戦意がない。そちらの国と良い関係を築いていきたいのだ。そのため、そちらに一人使者を遣わす。和議についてその使者と話をしてほしい。

和議についての話をそちらが受け入れようが受け入れまいが、使者が帰ってこない、殺してから我々に突き返す、またはけがをして戻ってきたとなれば、貴国の軍を無事で返すつもりはない。

そちらは宣戦布告もなしにこの戦を開始し、新たな戦術等を得たつもりで我が国を滅ぼしにかかったようだが、貴国にその知識提供者がいるように我が国にもそのような人物がいるというのを伝えておく。それを一番実感しているのは貴国であろう。

くれぐれもご英断を誤らぬように。

「コルト・・・どうか無事に良い結果を持ち帰ってきて。」

祈るように目を閉じた。

第五話 使者（後書き）

こついう戦争ものは、頭悪いので戦略とか考えられません。 o r z

第六話 使者の帰還（前書き）

毎度お馴染み急展開です。

第六話 使者の帰還

矢文を放つてから、攻撃はピタリとやんだ。

その間に城壁の修理などの被害への対応に追われる。もちろんその間も兵を配置して気を配らせた。

首都の人口は二十万ほど。そのなかで兵士として活動できる年齢の男は三、四万いくかないか。

もし攻め込まれても、第二の城壁がある城へかくまってやれるのもわずかしいない。

だから、城下町を守る第一の城壁をどうしても死守しなければならぬのだ。

「使者の準備が整いました。」

「・・・わかりました。矢を放って下さい。」

「ハッ!!」

第二の矢文を放つように兵士に命じる。もしもの時のために十本ほど同じ内容の紙をつけた矢を放たせた。

内容は簡素に、今からそちらに使者をよこす。くれぐれも余計な真似はせぬように。

と、だけ書いたもの。

しばらくすると別の兵士から、ヘイロネア軍が手紙を受け取ったという旨の伝言がきた。

「城門は開けずに、・・・『縄梯子』ってなんて言うのかしら・・・

縄で作った梯子で、城壁から使者を降ろしてやりなさい。」

それからが長かった。

六時間たつても彼は戻ってこない。イライラと部屋の中を動き回る。私の周りにいるおえらいさんたちも落ち着かないようでそわそわしっぱなしだ。

昨日から多人数が休まず掘り続けているトンネルは目的の山まではまだまだだ。このトンネルは使いたくないが、和議が受け入れられなかった時のために何があっても掘り続ける必要がある。

コルトは殺されてしまったのではないか。いや、それなら攻撃をしてきてもおかしくない。それとも何か裏があるのだろうか。

「矢文を放つわ。用意して。」

近くの兵士と文官に矢と手紙の用意をさせる。

「はい！何と書き記しましょうか？」

「………使者の無事を確認させよ。それからいつまで待たせるつもりだ。もしこの和議が受け入れられなかった時には、こちらにも考えがある。再度通告する。我が国にも、貴国にいるような人物がいる。貴国も大きな犠牲をしなければ、そうやすやすとは落とせぬと思え。ご英断のほどを。……と書いて。……できた？」

「はい！」

「第一の門へ行って放ってきて。」

城下町を守る城壁へ行かせて、報告を待つ。

「ヘイロネア軍受け取りました!!」

「御苦労。」

兵士にねぎらいの言葉をかけて、この国の参謀的役割の人たちと話し合う。

「これくらいの脅しをしないとやはり引かないでしょうか？」

「そうですね。軍事の中枢を担える、優秀な人物がいると匂わせるのは良い脅しでしょう。それは、しかけてきたヘイロネアが一番わかっているかと。七日ほどかけてじわじわ弱らせて、余裕で乗っ取るつもりが、思わぬ反撃に出られてかなり驚いていると思いますよ。少なくとも私なら驚きます。」

「ですが、あまりこちらにどのような人物がいるかという情報は知られたくなかったのも事実ですな。今後のことを考えると、という話ですが。」

「今は国の存亡がかかっております。今までの戦とは違うのです。未来のことを心配するよりも、今のこの状況を抜け出すことが第一です。・・・アーシャルバー代理のことについて、今後悩めるのならそれは幸いです。なにせ我が国が存続できているということですから。」

一応脅しのために私の存在をヘイロネアに伝えているが、本当は大したことはない小娘だ。兎に角、私みたいな小娘でも、あんたの国にいるような（いると仮定して）未知の知識を持った優秀な人物がうちの国にもいるんだよ」ということを、脅しでもはったりでも構わないから知らしめておくのが大事なのだ。

「失礼します！！使者殿の無事が先ほど確認できました！！テントの中から出てきて、大きく手を振ってまたテントに戻ったとのことです。」

部屋に飛び込んできた兵士の言葉に、皆安堵して溜息を吐いたり、隣の者と話したりして少し騒がしくなった。

「皆の者！！使者の無事が確認されたところで、そろそろ私たちも遅い夕食を取らないか？もうすでに夢の刻寄りの星の刻を過ぎてしまったからな。それに使者が向こうにいる間は襲ってはこめだろうし、まだ取引の途中のようだ。」

アーシャルバーが大部屋の人たちにもちかける。気を抜くわけではないが、みんなでご飯を食べようという。それには多くの者が賛同した。星の刻は大体八時から十時ごろのことだ。夢の刻とは十時から十二時のこと。夢の刻寄りの星の刻とは大体九時半過ぎということになっている。

十一時から一時に当てはまる光の刻に昼食を食べた後は何も口にしていけない。そのことを思い出すと急激にお腹がすいてきた。流石に何か食べないとヤバイ。気を張っていてご飯のことを忘れていた。支給された夕飯は、パンっぽい平たくて丸っこいものと見た目がグロイ爬虫類に似た生き物を焼いたもの、それからコーンとかぼちゃを足して二で割ったようなポタージュに似たスープ。

私からしたら十分だったけど、ここのエライさんからしたら粗食だ。

危機的状況下で、食べ物により大切に扱う必要があるからだ。もちろん誰も文句など言わない。

そのことを思うと、ここの政治家たちはホントに国民思いだ。

翌朝、目覚めてからすぐに会議が始まった。議題は武器の補充についてだ。

敵が攻めてこない間はもちろんチャンスとして利用する。この先のことを考える期間があるのだ。

使者を出したことで『攻められない時間』というものを手に入れた。

「それでは会議を始めましょう。議題は武器の補充についてだ。・・・といつても、ユーコよ。お主はもう武器は補充できたと申しておったが？」

「はい。ヘイロネア軍が私たちにくれたではないですか。火矢以外の矢が放たれそうな場合は、木とスルロー（藁に似た植物）をぶ厚く編んだ盾で身を守れと命令しました。そしてその使い終わった盾の矢は抜いて持つてくるようにとも申しつけました。それにヘイロネア軍が引き揚げたわずかな時間内に、両国の死体を回収もさせました。敵も味方も死体は丁寧に扱わせておりますし、彼らの武器や防具なども今後のことも考え使わせております。・・・。残念ながら、捕虜としてとらえることができたヘイロネア兵がいないので、あちらの情報を手に入れることはできていません。捕虜に

するため生かしておこうと思えるほど弱くなく、命の危険を我が軍の兵が感じているからでしょうね。隣のイルアス国へ派遣した使者も、今日で派遣して四日目です。あと三日ほど耐えれば、イルアスからの援軍または支援物資がくるかもしれません。それに、武器を作るために、マフダ（鉄に似たもの）で作られた日用品などを寄付してもらおうのはいかがでしょうか？」

矢の仕入れ方は・・・三国志をある程度知っている人ならわかっただろう。

マフダの寄付は、WW2の戦中に日本が国民から鍋などの鉄製品を差し出させたことから思いついた。

国民には悪いが、家にある鍋やフライパンその他もろもろのマフダ日用品を一つ提出してもらうことにする。

「うむ。なかなかの方法ですな。私はそんなこと思いつきもなかったよ。ねえ、みなさん？」

宰相が同意を求めると、大臣たち一同は何度が首を縦に振る。

「では武器調達は、代理殿の言うとおりにするということですよしいですな。マフダは直ぐに、首都の者たちに理由を説明して提出させましょう。・・・戦争を首都の者たちだけでこなすのは難しいですが、敵が到着する一日前に各町や村に使者を派遣したので、距離が近い町村の者たちは首都周辺に集まってきて敵軍を包囲しています。心強いことです。まっ、今は和議の最中ですし手出しはしませんかね。」

「宰相、気を抜くのはすべてが終わってからですよ。」

「わかってますよ、代理殿。戦は生き物ってね。」

「皆様！！！使者が戻ってまいりました！！！」

興奮しながら兵士が部屋に飛び込んできく。戦争が始まって六日、コルトをヘイロネア軍に派遣して三日がたったころだった。

「！！！！すぐこの部屋に通して！！！」

しばらくすると、少しやつれた顔をしたコルトが戻ってきた。

「ただいま戻りました。」

「・・・無事で何よりです。ほんとに無事に戻ってきてくれて有難う、コルト。」

私に続いて大臣たちがコルトへねぎらいの言葉をかける。

「・・・その言葉だけで十分でございます。私のことなど心配して下さるなんて・・・」

コルトは感動したのか、涙ぐみながらそう言った。

「疲れているところすまないが、結果報告を頼みたいのだが。」

「はい、アーシャルバー。」

コルトの報告によると、ヘイロネア軍の一指揮官である自分一人では決められない。そのため、ヘイロネアへこの和議の申し出について知らせるために、軍の何人かをヘイロネアへ向かわせたい。との要求をしているらしい。それが認められないのなら和議の話はなかったこととすると言って聞かないのだ。

「なにを馬鹿なことを！！誰がそのような見え透いた嘘を信じるとても？思っているより落とすことができず、首都の周りに召集された我が国の兵士たちがいるのを知っているから、この和議の案を利用して援軍を呼ぶつもりだ！！アーシャルバー、このような要求を受け入れてはいけません。」

「・・・將軍の言うとおりやもしれんの。他の者、何か意見はあるか？」

みんな同じことを思ったのか、誰も口を開かない。
もちろん將軍の言うことも一理ある。だけど、ヘイロネアの言い分もわかる。

和議についてはもちろん国のトップへ知らさなければならぬ。
向こうもこれほど落としにくいとおもわなかったし、周りもじわじわ囲まれてきている。首都の私たちも囲まれているが、ヘイロネアを召集された地方の兵士たちが囲みだしている。つまりは、ヘイロネアからすればさみこまれているということだ。こちらは不利から一転有利になっていた。

「あの・・・」

「なんだ？ユーコ、申してみよ。」

「今私たちは有利な状況となっています。あちらをなめてるわけでも気を抜いてるわけでもありませんが、ヘイロネアへ送らせてみては？もしもの為に、各地からどんどん集まってきている兵士たちをこの国とヘイロネアをつなぐ通路の付近に忍ばせていますよね。彼らにこう司令しましょう。通るのがヘイロネア兵ならゲリラ作戦を決行。ゲリラ作戦については説明しましたよね。ちゃんと決断を聞いてきた、またはこれからこちらにきて決断を下す権利を与えられた数人が通った場合はゲリラ作戦はなしで。物資や兵士を運んできたヘイロネア側の友好国が進行してきた場合もゲリラ作戦でしっかり弱らせてもらいましょう。」

「とのことだが皆はどう思う。」

アーシャルバーの問いかけに、財政担当の大臣が答える。

「私は代理殿の案を推します。このまま行かせずにいれば、包囲軍を我々は制圧できるでしょう。時が味方したのです。ですがその制圧には多くの犠牲を払うことになるでしょう。なぜなら、制圧できるかもしれませんが、奴らは先ほど遠目から見てもわかるとおり我々の知らない剣の使い方をする。我が軍の兵より格段に強い。一人に五人ほど必要なぐらいだ。きっと我々も大きな被害を出しての勝利となるう。・・・ですが！！！それでは意味がありません！！アーシャルバーはなるべく被害を出したくないからと城にこもるという決断をなされた。勝つても多くの者が傷つきます。城にこもった意味がありません。ここは一つ、和議にかけてみるのも一興かと・・・。ダメならダメで、最後の手段として多大なる犠牲の上での勝利を勝ち取りましょう。」

「大臣……。」

年老いたカエルそっくりの大臣が、私の意見に賛同してくれた。

「……私も代理殿の意見に賛成をいたします。犠牲を出さなくて済む方にかけるのがこの国のためかと……。」

「私もです。」

「私も。」

次々とみんなが賛成を表明していく。將軍もしぶしぶだが賛成してくれたようだ。

「では、ユーコの案が採択ということによろしいですな。」

アーシャルバーが机を囲む面々をぐるっと見渡し再度聞く。

「それでは矢文を放たせよう。」

この矢文にも脅しの言葉を添えつける。

もし軍を連れて戻ってきた場合は、城を包囲している軍も援軍として送られてきた軍もただでは済まないと思え。こちらはもう和議をする必要などなくなっているが、アーシャルバーのご慈悲により貴国に許しがでているのだ。こちらにも打つ手など他にもいくつも用意してあることを、何度も忠告申し上げる。

矢文を放ってからしばらくすると、五人の兵士がヘイロネアへ向けて出発したとの報告が来た。

この時点でヴィーリンガルト国（首都クロウイグ）の被害

死者：八千三百九十二人

重傷者：五千六百三十三人

軽傷者：一万二千八百一人

行方不明者：百九十五人

建物：第一の門の城壁

農作物：首都周辺の畑、森

家畜：被害なし

第六話 使者の帰還（後書き）

話数がある程度のところまできたので、更新速度を落としたいとおもいます。

ヘタレ作者でごめんなさいm(_____)m
因みに、

ヘイロネア軍をかこんでいる召集された兵隊さんたちへの指令は、伝書鳩的システムで、届けられた空飛ぶ生き物に書簡をくくりつけて送っています。遠い距離だときついですが、首都を少しこえたところぐらいまでなら正確に運んでくれます。

第七話 もつべきものは友達（前書き）

戦争の長期化で戦況が一変したようです。

第七話 もつべきものは友達

戦争がはじまって十日あまりたった。ヘイロネアから返事がくるまであと四日ほど。

「イルアスへ行っていた使者が首都付近まで来たとのことです!! 一万五千の兵と救援物資と共にです!!」

「益々我らの有利だ!! 神は我々に味方したか?」

兵士からの情報に会議室が沸き立った。考えていたより二日ほど遅れての援軍だった。

「ですが誘導するためのトンネルがまだ・・・」

「イルアスの兵にはヘイロネア軍を包囲するのを手伝ってもらえばいいので、その場で待機ということで。トンネルはあと一日二日で出来そうです。なんせ五万人近い首都の者たちが必死に休まず掘っているのです。」

会議室にいろんな案が飛び交います。

そんな中私は一人刀を前に考えていた。將軍たちが強いと恐怖したヘイロネア軍の剣の使い方や構えを前線近くへ見にいった驚愕したそれはひどく懐かしいものだった。

ほぼ確実に、私以外にこちらへやってきた日本をよく知る人物がいる。

日本、剣道、この世界へ来る前にいた場所……でも彼は屋上へは入らなかったはず。

だけど、だけど、ホントに低い確率だけど……もし何か事情があって屋上へ彼が入ったのだとしたら？可能性としてはありえる。

私がここへ来たときのように、どこかへつながっている場所がいろんな所にあるのだとしたら。

………。

「やめよう。下手な期待をして傷つくのは自分だわ。」

忘れたつもりでいた淡い感情がよみがえってくる。

なんとか自分にそう言い聞かせるが、わずかな期待は膨らんでゆくばかりだった。

「ご報告を！！ヘイロネアから十人ほどの人がこちらへ向かっているもようであります！！あと半日ほどでこちらへ到着するかと。」

兵士が会議室へ飛び込んでくる。

「和議の可能性が高くなったぞ。」

「いきなり仕掛けられたこちらからしたら、ある意味くやしいですね。」

皆が好き勝手しゃべり出すと、アーシャルバーが大きくわざとらしい咳をして注目を自分に集めさせる。

「和議の話し合いをするにあたって、そこに立ち会う者を選ぼうと思う。あちら側の人数にもよるが、両国とも三人ずつで話し合おうと思うんじゃが。私の他誰が適任かのう。」

「アーシャルバー直々というのはあぶないのでは？」

「わたしが行かずに誰が行くというのだ。」

私も興味がある。ぜひ参加してみたいが、採用枠は残り二人だ。入れるかな？

「私としては、取引上手な宰相と参謀がよいのじゃが・・・どう思う？」

誰を残りの二人にするか選ぶために、声が次々と上がる中考える。
確実に私が話し合いが行われる部屋に入れる方法・・・。
・・・あるじゃない。

「アーシャルバー、私、ぜひに話し合いの支給を担当をしたいのです。させてくださいますよね。」

有無を言わさぬようにニツコリと微笑んできめてやる。

ここでためらいがちに伺ったりしたら、「君は今までよくやってくれた。だが、ここからは戦争ではなく駆け引きだ。それに敵と同じ部屋に入るのだ。どんな危険なことがあるかわからない。この部屋で安全に過ごしていたのとは違う。支給は武芸に長けた男の使用人にまかせる。」とか言われて終わりだ。ここは引かない方がよい。

「いや、だが「よろしいですよ、アーシャルバー。」……………」

「ありがとうございます。私ほど適役はありませんものね。なにせ本来の仕事は支給専門の使用人ですし、内部の事情もある程度わかっておりますから。ああ、私、少し疲れてしまいましたので自室に戻って休憩させていただきますわね。失礼。」

他の大臣たちにも何か言う暇を与えずに、さっさときびすをかえして部屋を出ていく。

私が出ていった部屋には、ポカーンとしたおえらいさんが残された。そこでは、代理殿はとんでもなく腹黒いのはだとか、フィリシュ（この世界のタヌキのような生き物）のようだとか、雇う職場を間違えてるんじゃないかとか、あの笑顔は聖女の皮を被ったヴィクターン（この世界の伝説上のモンスター、魔物と訳せるものの王様。すなわち魔王）だとか何とかという言葉が聞こえたとか聞こえなかったとか。

部屋に戻ると同室の三人にいつきに囲まれる。

「どうゆーことよユーコ！……いきなりこの部屋に戻ってこなくなったと思ったらアーシャルバーの権限を与えられただなんて！！城中その話題でもちきりよ。支給係の使用人がアーシャルバー代理になってこの戦争の中枢を担ってるって。」

可愛い可愛いルーベルがシャーシャー言いながら詰め寄ってくる。

「ルーは少し落ち着いて。……でもホントよ。私たちとても心配してたのよ。何があつたのか話してくれる？」

ワニ顔のガルサが心配したように言ってくる。最初見たとき怖い顔、女かわかんないと思ってごめんなさい。

不思議っ子のシェイラーは何も言わずこちらを見続ける。こっちの方がよっぽど怖い。なんだかかなりご立腹のようだ。

「悪かったわ。でもとても急なことだったのよ、わかってちょうだい。まあ、ここで立ち話もなんだから座りましょ。」

私がイスに座ると、三人は二段ベッドの下のベッドに腰かけた。

「簡単に言っと、今回の戦争って今までの戦争と違うでしょ。城壁だって敵兵が攻めて来た時のためのものじゃなくて、いろいろな意味があつて一応作られてただけでしょ？でも今回それがとても役立つような戦争だった。要するに、はじめて国に攻め込まれた。だから何をしたいのか上の連中は何をしたいのかわからなかったの。」

「そこでなんでユーコに関係するのよ。」

「最後まで聞いて、ルー。・・・対応が遅れたから、首都の人たちだけで戦わなければならない。それにアーシャルバーは戦争による死をなるべく減らしたいと考えていた。直接対決すれば、こっちが奇跡でも起こらない限り負けてた。だから城にこもって敵があきらめて帰ってくれるまで対抗することにした。だけど、籠るにしても何をしたいのかわからない。そこで居合わせた私が、たまたま自分の国で過去にあった似たような戦い方とかの知識を教えたの。もしたらアーシャルバーが私の知識に頼ろうってことで代理任命されて、色々助言したりしてたのよ。それに、一回だけ部屋にも戻ってきたのよ。（まあ、仕事中にノート取りに戻った一瞬だけだね）」

「・・・危ないことなく良かった・・・」

シェイラーがポツリとつぶやく。相変わらずその顔は無表情で何を考へてるのかつかむのに難しい。だけど心配してくれていたのはよくわかった。

「何もしらせなくてごめん。心配かけてごめん。それから、有難う。」

「何いつてるの！！私たち友達なんだから当たり前でしょ！！」

照れたように言うルーベルの言葉に、慣れないことで知らずに緊張していたのかどつと疲れがでてきて、今さら体が恐怖に震えた。頬を暖かいしずくが止まることなく伝っていく。

「・・・うう・・・こわ、怖かったの・・・ヒック・・・遠くからでも・・・ヒック・・・たくさんの人が死んでいくのが・・・見えて・・・」

「そうね、怖かったわね。辛かったわね。いっぱい泣きなさい。」

嗚咽を漏らしながら話す私の言葉をきいて、ガルサが私の背中を優しくゆつくりとなでてくれる。

シェイラーは無言で私の右手を、ルーベルが左手を握ってくれる。

「・・・・・・ありがとう。ホントにありがとう。」

私は十八年しかいなかった向こうの世界を懐かしんでばかりで、私を思ってくれるこっちの世界の人たちをないがしろにしていたのかもしれない。彼らのホントの優しさに気づけなかった。向こうの世界に、家族以外にこれほど私を思ってくれる人はいらるだろうか。家族も悲しんでくれるだろう。だけど、それでもこれから生きていくのだ。私のことを忘れはしないが、時間がたてばたつほど私を思う時間は少なくなる。それは私にも当てはまる。

帰ることができないなら、この人として彼らと生きていこう。向こうを忘れることはできないけど、私を大切に思ってくれる人はここにもいる。

彼らと向き合っている。私、ここで生きていく。

小話 ラグの秘密（前書き）

ひとつ忠告します。

ラグ、アホです。ラグに良いイメージを持つときたい人は飛ばして下さい。

小話 ラグの秘密

みなさま、突然ですがこんにちは。神武官ラグです。

この間、神殿に遊びに来た妹と一緒に私が連れてきたユーコがやってきました。

ユーコは流れるような黒く艶やかな肩甲骨まである髪の毛先を内側に巻いた髪型をしており、健康的な白い肌をしています。顔も私の国ではとんでもなく美人だといわれるほどのつくりです。

私が助けたときも、よこしまな考えがあつたかと聞かれれば私は神官なので、女性にそのような f h f ; 愛江 f ; い h だ ; d か k j こ によごによ・・・まあそれは置いて、兎に角城で働いている者たちでユーコを知らないのは上の人たちだけだろう。（わざわざ誰それがカワイイだとか美人だとかいう話を下働きの人がしないから）

ユーコには内緒だが、城下町でもかなり評判で、ユーコが城下へ友達と連れ立って遊びに行くすぐに知れ渡る。内緒にしなければいけない内容とは、勝手にユーコの姿を描いた絵が売り出されていて大ヒットしているということだ。かくいう私も持っていん b d f か j、。 g k ふ あ d・・・知り合いからいただきました。いや、別に欲しかったというわけでは・・・（ホントは友達の武官に無理やり買いに行かせた）

もう一つの秘密ですが、そんなにモテモテなら恋人の一人や二人と

お思いでしょうがそうは問屋が許しませんよー！ー！我々はフ
アंकラブを作り、ユーコ不可侵条約を結んでいるのです。この二
つに入らないとユーコに近づいてはいけませんのです。もちろん入れ
ばアタックもアピールもしすぎてはいけません。もし、この二つに
入っていないモノがユーコに話しかけたりすると・・・（ガクガクブルブル）
以上は私の口からはとても・・・（ガクガクブルブル）
とても厳しいお仕置きが待っているのです。

ユーコが誰か一人のものになるくらいなら、自分も手にいれること
はできないが誰のものにもならずにくれた方がよろしいのです。

ゴホンツ！ー兎に角、そんなユーコが遊びに来たのです。そりゃあ
ー神殿は色めき立っています。

色々と危険を感じた私は、場所を移動させることにしました。

知り合いの営む洒落た食事をとれるお店で、ユーコから質問をされ
ました。

「前から思ってたのだけど、ラグは肌の色緑よね。シェイラーから
も聞いたけど、そういう人達ってほとんど食事取らなくても大丈夫
ってホント？？」

ああ、言い忘れてましたがシェイラーとは私の妹のことです。これ
が困ったことでほとんどしゃべらないんです。兄さんお前の嫁のもら
い手があるのか心配で心配で夜も寝むryjjfb
まあそれは置いて・・・

「そうだよ。朝の一つ星の光（太陽的役割の星）を浴びれば何故だ
かエネルギーが湧くんだよね。特に水を飲んで、皆が呼吸しにくい
って言うところに行くとその色が顕著なんだよね。」

「！！！！！！よ、葉緑体なの！！！！その肌の色の原因は葉緑体なの

か！！！！！どうやってそんな進化の過程を経たのよ！！！！植物と動物がどうやって合体したのよ！！！！」

「????????」

「.....」

一人で叫び出したユーコは何かを言ってるがまったくわからない。ユーコの国の言葉だろう。

ユーコは興奮するとこの言葉で話す。

妹は相変わらずボケっとしている。実にこの国は今日も平和だ。良いことだ。

私は朝の二つ星の光をめいっぱい浴びながらエネルギーを充電しつつ、叫ぶユーコをにこにこしながら見ていました。

めでたしめでたし。

「なに笑ってるの!!!!」

「ハハハハ何でもないよハハハハ今日も平和だなあーっと思っただけさハハハハハ」

「なんかむかつく……………」

「ユーコ、気にしない。お兄ちゃん、アホだから……………」

小話 ラグの秘密（後書き）

シェイラー……ラグが反面教師だったのね。

第八話 和議（前書き）

めっちゃくちゃ短いです。

第八話 和議

数日前までできていた使用人の服にそでを通す。

なんだかとても久しぶりに着た気分だ。つい何日か礼服を着てたから奇妙な感じがする。

ヘイロネアからの使者が到着して、二日目の朝。長旅で疲れているだろうということゆっくりと休んでもらってから話し合いをするとのことだ。

話によると、八人が使者と共に着たそうで、一人が十四、五歳の少女だという以外はごつい男ばかりだという。しかもかなり大柄な態度のようで、こちらの食べ物を一切食べようとせず、自分たちが連れてきた使用人以外は部屋にも入れないという。ここまで徹底的だと逆にすごいわ、ヘイロネア。

今日はその中の三人と話合う日だ。私は飲み物を用意したりするために早めに部屋に入って待機する。まあ、用意したってヘイロネアの人たちは飲んだりしないのだろうけど。

用意が終わってしばらくしてアーシャルバーと宰相、参謀の一人が入ってきた。

「・・・本当にお前という娘は・・・とんでもないの。敵と向かい合うのだから危険じゃというのに。」

アーシャルバーはやんちゃすぎる孫を持った爺さんのように溜息を吐く。

「お褒めにあずかり光栄です。何かあったら私の知識をお貸しいたします。」

「ほめとらん!!」

「ハハハハ、ホントに肝の据わった女性ですね。」

「笑いごとではないわい、宰相。私は心配して居るのじゃ。」

そんなやり取りをしながら椅子に座る三人。
話し合いの時間まで、あと十分。

「ヘイロネア国の皆様到着いたしました!!!」

扉の前から兵士の声が聞こえた。
談笑していた三人が、顔をキッと引き締め立ち上がる。

私は、その三人の後ろの壁際に立って両手を前で組んで少し俯く。

「お通ししてさしあげろ。」

「ハッ!!」

扉が開かれゆつくりとした足取りの靴音が複数聞こえてくる。
どんな顔なのか気になって、うつ向かせていた顔を少しあげて見てみる。

言葉を失った。

「嘘……………」

ぽつりと小さな声でつぶやいた声は静かな部屋では、思いのほか響いたようだ。

扉の一番前にいた人物と目が合う。その瞳が大きく見開かれた。

「.....高田」

「武藤君.....」

第八話 和議（後書き）

皆さんわかってましたよね。

こんなにわかりやすいことをもったいつけて長く書いてすみません。

第九話（武藤サイド） 愛しいのに憎い君（前書き）

武藤君サイドです。

第九話（武藤サイド） 愛しいのに憎い君

俺には好きな女ひとがいる。

立てば芍薬座れば牡丹 歩く姿は百合の花

彼女のためにあるような言葉。

背中へ流れる艶やかな黒髪。白いのに不健康な感じがまったくしない肌。パツチリというわけではないが、線が引かれたような二重で切れ長の目。色っぱいという表現が当てはまる。柳の葉のように緩やかな眉。

低すぎず高すぎず、スツと筋の通った小ぶりの鼻におちよぽ口に近いサイズの口。

それらが卵型の顔にバランスよくなっている。

どこか、自分の周りにいる女子高生とは違った不思議な雰囲気。いつも掴みどころのない笑顔を浮かべている。近づきたいのに近づけない。

彼女は別次元の人間。

俺には手の届かない高嶺の花。それが彼女。

「おい、武藤。クラス今年も一緒だな!!」

「ああ。」

友人の山口が話しかけてくる。結局三年間こいつとは一緒のクラスだったな。

「まじかよ!!! よつしゃー!!! むとー!!! 今年は受験だが、我々はそんな嫌なことを忘れさせるラッキーを手に入れた!!! 何かわかるかい? 武藤君。」

相変わらずテンションが高くてうざいな。そのまま受験忘れて浪人しろ。

「.....」

「ほら、クラス表よく見てみる。高田優子って書いてあるだろ? なっ?」

「だから?」

「.....おま.....ちょ.....えっ? 高田優子だぞ? わかるか? だ・か・だ・ゆ・う・こ。あの高田優子と同じクラスだぞ。知ってるよな。」

「名前はしってる。だから?」

驚愕して慌て出した山口を横へ引つ張ってゆく。
後ろにも表を見たいやつがいるのに、俺らがずっと前にいたら邪魔になる。

「お前・・・ついてるのか？」

「・・・・・・・・・・」

何も言わずに殴っておいた。

「・・・そうだよな。おまえが実は女です、なんてことになったら俺女の子信じられなくなる。」

何しめじみ呟いてんだ。似あわねえよ。そのままゲイかバイになればいい。いや、そうしたら俺もこいつの性的対象になるのか。
なら、一生モテない女好きでいろ。

「名前は知ってるってことは、顔とかは見たことないんだ？」

「ああ。」

「まあ今までクラスも離れてたし、お前そういうのとか疎いから知らなくてもしゃーないか。名前知ってただけでも上出来だな。」

なんなんだ。この上から目線・・・。

「・・・・・・・・・・」

「兎に角、見てみたらわかるよ。なんでこんなに有名なのか。ちなみに俺ファンクラブ会員？0057。二桁とか、かなり上位なんだ

ぜ〜いいだろ。オフィシャルファンクラブにしたいんだけどさ、なかなか言い出しにくいんだよコレが。」

後ろで何かごちゃごちゃとうるさいやつをほって、自分の新しいクラスへ向かう。

新しい教室に入ると、もうほとんどの奴が集まっていた。流石に三年目だけあって、かなりの奴らが知り合いみたいだ。一年の最初の時とは違ってグループになるのも早い。

だから友達作りにながつくことなく皆思い思いの行動をしている。

俺も名前の座席表を確かめて、自分の席へ移動する。廊下側の後ろから三番目。まあ、なかなかいい席だ。山口は隣の列で、教卓の真ん前の前から一番目。アホにはちょうどいい似合いの席だ。せいぜい先生に見張られとけ。

「むとー！！俺の席最悪なんだけど。お前はなかなか立地条件いい席だな。」

「ああ。」

俺のところによつてきた山口は、そわそわと落ち着きなくあたりを見回している。

「…………上手く隠してるようだがバレバレだ。まずキヨどるな。」

「あつ！いたぞ、あの方が我らが麗しの優子姫だ。」

山口の目線を辿ると、あいつが指し示している人間が誰だかすぐに分かった。

兎に角、周りとは違う。顔の美醜だけはない。見目が良い奴なら掃いて捨てるほどいるだろう。だけど纏う空気からしてその辺にいる

ような奴じゃない。カリスマ性というやつだろうか。とても惹かれる。ひれ伏したくなる支配者のそれと似ている。

上に立つべきために生まれてきた人間というものを初めて見た気がした。

彼女は前の席の女と話を聞きつつ本を読んでいた。

「はあ、我らが女神は今日も美しい。なっ？武藤。・・・おい、武藤？武藤！聞いてるか？」

俺は山口の話なんか耳に入っていなかった。雷に打たれたような衝撃に打たれ、彼女にただとらわれていた。

今まで体験したことがない衝撃だったため、自分のこの気持ち為何なのか気づくのには時間がかかった。

気付いたところで、俺にはどうしようもないのだが。

俺は一目惚れというものをしたらしい。

まさか自分が体験するとは思わなかった。

科学的には、一目惚れというのは自分の持っていない遺伝子や免疫なんかを子孫に伝えたいがためのものらしい。詳しいことは俺にもよくわからないが、もしそうなら彼女は他の人間とは違ったものを持っているのは確かだから、大層本能的面でも惚れられるのだろう。理性的な面でも彼女は最高に良い女の子のようだ。

俺みたいに女子供に怖がられるような男には彼女を得るのは到底無理な話だ。

馬鹿みたいに遠くから見つめるだけの一員になるだけで満足しなければならぬ。

そのくせ、告白する勇氣も持ち合わせてないくせに、彼女に他の男が近づくときそれを殺したくなる。

そんな自分に自己嫌悪して昔からやってた剣道で憂さを晴らすように相手を叩きのめす。

乙女なわけじゃないが、ホントにこんな気持ちにさせる彼女が憎くなるほどに気持ちが日々募ってゆく。

身勝手な独りよがり。

愛と憎しみは表裏一体。可愛さ余って憎さ百倍。
まさか自分が体験するなんて。

第九話（武藤サイド） 愛しいのに憎い君（後書き）

二人とも気づいてないだけでお互いべた惚れです。

第十話（武藤サイド）色んな君を知りたい（前書き）

すみません。優子の漢字が違ったのでなおすついでに、文章やサブタイトルをいじってかえたんですが、間違えて十一話としてのせてしまいました。十話のもりです。でも、十一話もなるべく早く載せるので気にしないでくれたらと・・・

第十話（武藤サイド）色んな君を知りたい

ただ見ているだけだった存在の彼女と急速に接近したのは七月だった。

俺の通う貧乏公立高校は、まだクーラーをつけるのを何とか引き延ばしている。死ぬほど臭い防具をつけながらの剣道は、暑さとの勝負でもあった。

なるべく涼しくしようと、重い鉄の扉をすべて開けっ放しにする。その時、遠くの方からたくさんの楽器の音が聞こえてくる。

吹奏楽部か………。

少し外の様子を見てみると、二階の音楽室付近の廊下の窓が全て開けられていて、そこから女子生徒が楽器を吹いているのが見える。そこには彼女がいた。

「トランペット……。」

肺活量のかなりかかる楽器を吹いてるんだな。木管系のフルートとかクラリネットの雰囲気だと思ってたけど。でも、彼女の性格にはあっているのかもしれない。

見つめ続けていると色々気づくことがある。周りは理想の高田優子を作り出し、その『高田優子』というフィルターを通してみているようだ。だから、自分のイメージと違うことがあると見ないふりをしたり、勝手に幻滅したりする。理想の『高田優子』を高田優子にかぶせられる彼女はどどういう心境なのだろうか。

彼女は意外と大食いだ。弁当のでかさとボリュームは男子並み。食わず嫌いで、肉ならなんでも好きらしい。野菜と魚という和食しか食べなさそうな顔なのに……。

砂糖とミルクたっぷりのロイヤルミルクティーが大好きで、お菓子もよく食べている。というよりか、気がついたら何か食べている状態だ。

この間は、こっそり早弁してるのを見た。ホントに見た目や雰囲気と行動や思考回路が全く合致しないタイプだ。なんというか、周りに流されず自分の思うように行動している。集団行動大好きな周りの奴らとは違い、集団行動もするけど一人でいてもなんら気にせず「皆という時間も好きだけど、一人の時間も必要」そんなことを指摘してきた友達に言っていた。サバサバと言つかひょうひょうしている。

そんなギャップも可愛いと思う俺は重傷だ。

「おい！！武藤、ボケつとするな！！」

「……すみません。」

部活中にボケつとしていたせいか、顧問の教師に怒鳴られた。こんなこと今までなかったのに。

いつものように部活で汗を流す。

時折、隣の校舎から吹奏楽部の練習している音が聞こえてくる。そんな時、無意識に彼女を探してしまう自分がある。

いた。

自意識過剰なのか、彼女がこちらを向いているような気がする。むずがゆい感じがしてなかなか集中できない。けどもし、本当にわずかな確率だが、彼女が俺のことを見ているのならば、やはり男心はかっこを付けたがる。

彼女にみつともない姿は見せられない。いいところを見せたいという気持ちがムクムクと湧いてくる。

だが、心なしか他の部員も気合が入っているように見える。

・・・・俺が思うようにこいつらも思ってるのか。

みつともないな。勝手に盛り上がって勝手に勘違いして・・・・早く練習に集中しよう。

あまりの暑さに倒れる生徒がいるかもしれないと顧問が言い出し、途中休憩となった。

吹奏楽部の練習も終わっているのか休憩のようだ。音が聞こえない。

裏にある水道の水を首筋にあてて体温を下げていると、わずかに人

の気配がした。

誰だ？こんなところ剣道部しか使わないし、先に他の奴らは体温下げたはずで俺が一番最後だぞ。

「何してるの？」

突然すぎてかたまってしまった。

「ああ、高田か。」

何とか平静を保とうと、こっさり深呼吸を繰り返す。
俺は普通に喋れただろうか。

第十話 (武藤サイド) 色んな君を知りたい (後書き)

第十一話（武藤サイド）視線

「まだ学校クーラーついてないだろ。だから防具着てると熱がこもるんだ。倒れないためにこまめに体温下げる必要があるんだけど、そのために首に水かけてんだ。高田は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

自分としては普通にできたつもりだったが、何故か彼女はしばらくフリーズしている。
もしかして俺はなにかとんでもない失敗をしてしまっただろうか。
急に不安な気持ちになっていく。

「・・・・・・・・？・・・・高田？」

「ああごめん。武藤君がこんなにしゃべってるの初めてみたもんだから。」

俺はそんなにしゃべらない男だと思われていたのか。というよりか事実そうだ。

彼女の前だから、知らずに気持ちが高揚して普段よりしゃべりすぎたんだろうか。兎に角恥ずかしい。
彼女が気づかなくても恥ずかしい。
顔が急激に熱くなっていくのを感じる。きっと赤くなっているだろう。

こんなに恥ずかしい思いをしたのは小学四年生の時の剣道の試合で、事前にトイレに行かなかったせいで漏らしかけて変な動きで戦った時以来だ。あの時は早く終わらせたくて変な動きだったが、驚異的なスピードで決着をつけた。勿論勝った。

余計なことも思い出して、思わず顔をおさえながらしゃがみこんでしまった。

「！！！！武藤君！大丈夫？どうしたの？」

しゃがみこんだ俺を心配してか、高田が駆け寄ってくる。

「いや、いい。大丈夫だから心配するな。」

なんとか彼女と話すチャンスを得ようと、自然になるように自分の隣をすすめる。

「座れよ。中腰疲れるだろ。」

目で自分の隣を指し示す武藤君の言葉に従い、そろそろと腰をおろす高田の気配に自分の心臓が激しく脈打つを感じる。

どんなことを話したらいいのか迷っていると、彼女から話しかけてくれた。

「私は部活の休憩中。外で暇つぶしてたら武藤君が水かぶってるのがみえたから……。」

「高田は吹奏楽だったよな。トランペットだろ。」

「！！・・・よく知ってるね。」

そりゃよく知ってるよ。ずっと高田ばかり見ていたんだから。でもこんなこと言えるわけねーよ。死んでも言えない。

「あ、ああ。まあな。ほら、あの、最近よく廊下で練習してるだろ。それでだよ。」

「確かに。ここからあそこ見えるもんね。私の所からもこっちよく見えたよ。私、武道とかよくわからないけど、武藤君がすごく強いのは遠目からでもわかったよ。」

「あ、有難う。俺も、ここまでお前の吹いてる音楽聞こえてきたけどさ、その・・・上手いと思うよ。俺みたいな素人がいうのもあれだけだよ。」

「クスッ、何この褒めあい。なんか恥ずかしいよ。フフッ。」

俺のことを少しでも彼女が知っていたというのがとてつもなく嬉しかった。

そのあとは、お互いの部活の後輩が探しに来るまで話し込んだ。信じられないくらい落ち着いた、安心できる空気の中での会話は、さらに俺を彼女に夢中にさせた。

楽しい時間はすぐに過ぎ去ってしまう。

この機会を逃したら二度と彼女と関われないと思い、背を向け歩き出す彼女を呼び止める。

「高田！！」

「?・・・何?」

呼び止めたはいいが、なんと言っているのか分からない。あたふたしながら言い訳を並べる。

「あゝあの、さ。お前さえよければその、なんだ、これから部活の休み時間いろいろ話さないか？あつ、嫌だったら別に全然かまわないんだ。ただいろいろ相談していければ凄くいいんじゃないかと思つて「いいよ。」そうだよな。嫌だよな・・・つて、え？」

「だから、いいよつて。時間もあるし・・・私も話したいし。」

「ホントに!？」

「ホントに。こんなことなんかで嘘いわないよ。」

こんな誘い、絶対に断られると思つていたのに意外な返事にまだ実感できず、しばらくは夢かと思つていた。

少しは好意的に見てもらえてると思つてもいいんだろうか。体格と顔つきのせいで、昔から女子供からは怖がられてたというか一歩引かれていたから、彼女の返事がとても意外だった。

あの日から二人ではほぼ毎日決まつた時間に道場裏に集まつて2、30分話すようになった。

その間、俺は柄にもなくにやけたり、声をたてて笑つた。こんな姿、周りが見たらびっくりするだろうな。

それ以外では話さなかったが、目があったりすると自然と頬の筋肉が持ち上がり笑いかけていた。
二人だけの時間が俺にとって貴重な時間となった。

最近、ある女子生徒とよく目があつ。すぐに逸らされてしまつから俺の勘違いかと思つたが、どうも回数が多すぎる。

目が合うと恥ずかしそうにすぐ逸らす、ちらちらとこつちを窺ってくる。

でもそのやり方がわざとらしいというか、手慣れていて嘘くさいのだ。

白い肌に、茶色い髪なんかふわふわした女だ。たぶん後輩だろう。男がちやほやするタイプだ。

彼女の視線の意味はなんとなくだが察しはついていた。

第十一話（武藤サイド）視線（後書き）

おひさしぶりです。

私は無事大学合格することができました。その前後の準備でかなり更新遅れちゃったんですけど、まだ見てくれる人がいたらお待ちせしてすみませんでしたm（――）m

これからも待たせる可能性大の作者ですが時々生存確認してください。あれば有り難いです。

第十二話 (武藤サイド) 面倒事 (前書き)

短いです。

第十二話（武藤サイド）面倒事

「あの！武藤先輩。今時間とれますか？」

部活に行こうとすると後ろから知らない声の名前を呼ぶ。

「・・・少しならとれる。で、それが何？」

「いえ、あの・・・ここでは少し言いにくいことなんで、場所を移しませんか？すぐすみませんで。」

「・・・清纯さをよそおった、そのわざとらしい媚をうった態度。誘いをかける吐きそうになる甘ったるい声。自分の思い通りになると信じて疑わない余裕をチラチラと見せる瞳。全てが癢に障る。さっさと終わらそう。」

「わかった。」

彼女についていくと、山口が高校三年間のうちに一度はそこにおよばれたいと言っていた西階段についた。
人通りの少ないここは有名かつ定番の告白スポットらしい。

「突然すいません。．．．．．あの、私、武藤先輩が好きです！！私と付き合ってくださいませんか！！」

少しためらった後、吐きだすように言う彼女の声をどこか冷めた気持ちで聞きながら、これが高田だったらなあとあり得ない想像をめぐらす。

「．．．．．ごめん。」

「な、なんですか！！私じゃだめですか！先輩のタイプの女の子になります！」自分に相当の自信があるのかなおも食い下がない彼女に対してイライラがたまる。自分が思っていた結果と違うことを受け入れられないようだ。

「．．．好きな．．．好きなこがいるんだ。だから君の気持には応えられない。」

「．．．それって．．．誰なのか教えてもらえませんか。」

「．．．それは．．．」

ガサッ！！タッタッタッタ．．．．．

「「！！！！！！」」

「チッ、誰かに聞かれたな。俺の好きな相手だが、誰にも言つつもりはない。」

イライラする。この子と付き合わないにしても、今の奴が根も葉もない噂を流したりしたら、ただでさえ高田と付き合える可能性の低

い俺なのに高田に余計な誤解をあたえてしまう。
本人へわざわざ付き合っ てないと言いに行くのもおかしいし。

「まっ、待つてください!!!」

呼びとめる彼女の声を後ろに残し、足音から逃げた奴が行ったと思われる方へと走り出す。

廊下を走りぬけると、足音は東階段を上っていく。足音は聞こえるが階段を挟んでいるので姿は見えない。

だが兎に角捕まえて、口封じをしなければれる可能性が高いだろう。幸い、俺の見かけは怖いといわれる方なので、脅せばなんとかなるかもしれない。

恐らく屋上へ向かっているのだろう。ならば話は早いな。

あと少しというところで、ドアの開閉の音がした。俺もそれに続き、五秒もしないうちにドアへ走り寄り扉を開き飛び込む。

飛び込んだ瞬間、俺の時間は少しの間止まった。そこは屋上などではなく、俺を見て騒ぐ着飾った何百人もの人間と無駄に豪華な広間だった。

第十二話（武藤サイド）面倒事（後書き）

お久しぶりです。作者です。

長い間ほったらかしでほんとにすみませんでしたm（――）m
いや、待っててくださる優しい方もいないと思う文書なんですけど、続きが何とか書ける状態にもどりつつあります。

外傷一つと二つの病気の三重苦になってしまい、寝たきりになってました。

何カ月も死んだような状態から体調も持ち直してきたのでご報告ついでにアップしました。

また倒れてかけなくなるときもあるかもしれませんがゆっくり待つてくださったらうれしいです。

皆さんも体調にお気をつけてすごしてくださいね（＾ｖ＾）でわいわ長々と失礼しました。

第十三話 金の髪と青い目の少女（前書き）

またまた短いです。

第十三話 金の髪と青い目の少女

一瞬でいろんな考えが頭の中を駆け巡る。本当に武藤君？そっくりさんじゃないの？いや、でも向こうも私を見て固まってるし本物じゃない？

「なんだ？ユーコ殿のお知り合いか？」

アーシャルバーの言葉にも答えを返せない。

「いつまで見つめあっているつもり！！その汚らわしい化け物！カズマサを誰が見てよいと申した！」

見つめあつて動かない二人の間にさつと飛び込む影。金髪碧眼のなかなかの美少女。

十五、六歳の少女とはこの子のことが。誰かに何となく似ている。でも誰だか思い出せない。

「聞いているの！？あゝ、それともあれかしら、卑しい獣や魔物には我ら聖族の言葉がわからないのかしら？」

明らかに侮蔑を含んだ声と、見下したような瞳。

「・・・申し訳ありません。お許しを。」

心を殺して頭をさげる。それよりも彼が武藤君だということが確定

してしまったというショックの方が大きくて心がマヒしている。
確かに彼女は彼のことをカズマサと呼んだ。武藤君の名前を忘れる
はずがない。彼のフルネームは武藤一将。

「サーシャ、やめろ。」

「だけどカズマサ、あなたを見つめてよろしいのは私だけでしてよ。
そして貴方が見つめてよろしいのも私だけでしてよ。特にこのよう
な・・・」

武藤君の胸に寄り添い甘えた声で少女が訴える。

「やめろと言ったはずだサーシャ！！！」

彼はそんな彼女を振り払うことはせず声を荒げ少女を注意する。

懐かしい声にうれしいはずなのに違った。下を向いたまま涙が出な
いように、ばれないように必死に歯をくいしばり耐える。彼に会え
てうれしいが、彼が名前を呼んだ少女と親しいと感じさせるやり取
り。私は武藤君に下の名前で呼んでもらったことは無いし、私も武
藤君の下の名前を呼んだことはない。しかも彼は彼女を振り払わな
かった。

悔しいやら、悲しいやらというマイナスの感情がグルグル渦巻き、
私はこんなに嫉妬深い女だったのだと知る。

少女と武藤君は一体どんな関係なの？

少なくとも彼女は武藤君に淡い思いを抱いているようだ。しかも武
藤君は振り払わない。

吐きそう吐きそう吐きそう気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い帰りたい帰りたい帰りたい

「あら婚約者に対して酷い言いようですこと。クスクス・・・でもそんな貴方も素敵ですわ。これが終われば私たちは国で神に祝われて結婚式をするんですからさっさとこんなこと終わらせましょ。あー、貴方がこの後私の旦那様になると思うと幸せですわ！」

目の前が真っ暗になった。

第十三話 金の髪と青い目の少女（後書き）

ほんとはすぐくっつけてあげて、あと数話でめでたしめでたしにしてあげるつもりでしたが、長期戦になりそうな内容に・・・でも読者の皆さんは、想像していた通りとなった人のほうが多いかな^^；

小話 私は何も持っていない（前書き）

今回は武藤君に告白した名無しの後輩ちゃんの今までの人生の独白です。

かなり根性悪いです。

小話 私は何も持っていない

生まれたときから全ては私の思い通りだった。

それなりに収入のある家庭に生まれ、しかもひとりっこ。親が高齢の時できた一人娘だったから欲しいものは何でも買ってくれたしやらせてくれた。もちろん何億とかは流石に無理だけど、私なら将来それくらい貢いでくれる人がいると思っている。

自分で言うのもなんだが私は男好きのするタイプの顔の女の子だしそれくらい可能だろう。

鏡を見ると両親のいいとこどりの顔が映る。母親似のぱっちり二重の大きな目と長いまつ毛に小さめのぷっくりしたピンクの唇に白い肌。父親から譲り受けた筋の通った鼻にシャープな輪郭に茶色めのフワフワの髪。

ちよっとカワイ子ぶっただけで簡単に男の子は落ちた。狙った男の子を見つめて目が合うとすぐに恥ずかしそうにそらすという行為を繰り返しただけで、数日後には告白してくる。

小学生の時は、きにくわない女の子がいたら男の子に「私、あの子嫌だな。」って囁くだけで瞬く間にその子は男の子からは虐められ、男の子に同じことをされたくない女子や嫌われたくない女子なんかに無視される。

暇な時なんかは適当にその役をローテーションさせたりしてた。

面白かったのは私と仲が良いと勝手に思い込んで、そのゲームに積極的に参加していた取り巻き女にそれをやったときだった。「嘘！なんで！なんで私なの？仲良しだったじゃない！私たち親友でしょ？」ほんとに思い込みの激しい女。

みんなの前でそう叫んだ彼女に内心爆笑する心を隠しおびえたように言う。

「えっ！？な、何言ってるの！？わ、私と森井さんが親友！？私そんなこと一言もいってないよ・・・森井さんはただのクラスメートだと思ってた。・・・森井さんおかしいよ・・・大丈夫？だってクラスの子に嫌なこととして笑ってるんだもん。酷いよ・・・。」

彼女に味方するものなど誰もいない。

だって彼女に前のターゲットたちは「イジメ」られてたんだもの。ほら、その証拠に前のターゲットたちの彼女に向けられる視線は凄いものだ。

彼女は自分が今までイジメていた子たちにやられたことをかえされるようになって、学校に来なくなった。

なーんだ、自分がやられたらすぐへばっちゃうんだ。つまんないの。彼女が来なくなりゲームは新たなターゲットを見つけた。私はゲームをより面白くするために良いことを思いついた。

「ねえ、安田さん？最近いつも一人でいるけどどうしたの？お友達と喧嘩したの？だったら私とお昼ごはん一緒に食べよ！」

「安田さん！次の移動教室一緒に行こう！」

「ねえねえ、美穂ちゃんって呼んでもいい？？」

「美穂！体育の二人組一緒になる！」

「家に遊びに行っていていい？ 後、今度の休みうちにお泊まりしにいいですよ！」

嫌われ者で虐められている彼女に優しくしている私はみんなから「とっても優しいね」と言われた。

もうそろそろ潮時かな。

彼女がいらないのを見計らい、あからさまにため息を吐く。すると「どうしたの？」とすぐ声がかかる。みんなが見守る中私はつらそうに言う。

「……実はね、私疲れちゃったんだ。安田さん、友達いなくてかわいそうだから仲良くしてたけど、あの子ずっと私にくっついてるの。私はみんなと仲良くしたいのに、他の子とおしゃべりしようとしたらすぐじやましたり意地悪するんだもん。やめてっていつでもやめてくれない。」

そこで私は声を少し詰まらせつつむく。そうすると、彼女が教室に戻って来た時には教室の雰囲気は前よりもひどくガラッと一変する。向けられる視線の意味に戸惑い、怯える彼女。みっともなくてごく面白かった。

また彼女も学校に来なくなった。

小学校卒業後、近所の中学に入学した。

小学校の好き好き同士で終りやすい恋愛と違い、中学になると、付き合うという概念が当たり前になっていた。

最初は告白してきた先輩や同級生の中で好みの人と付き合っていた。今付き合ってる人より、より好みの男が告白してきたらオッケーを出した後には彼氏に別れを告げた。

もちろん揉めないように適当な理由をつけて泣いて見せた。

それに付き合う時に、誰にも付き合ってることをばらさないでほしいと伝えていた。ばらしたら別れるという約束もしていたし。なんだか一人じゃ飽きた私は、他の男の子たちとも同時進行で付き合うことにした。

同じ学校だと別の男の子と仲良くしてたらすぐばれるので、他の中学や習い事で知り合った男の子たちと付き合うことにした。飽きたら捨てればいいし、予備もいっぱいいるし。

高校生になると人の男をとるのにハマった。

恋愛相談してきた同級生を応援するふりをして、その人の情報を聞き出すとか適当なことを言いその好きな人に近づく。そして仲良くなつて私になびくようにしたりした。

その子には、気持ちをはつきり伝えたほうが良いとアドバイスし告白させる。

勿論彼は私と良い感じになっていて、彼女と私を天秤にかけ当たり前のように私をとる。

その後そいつに告白された私は、彼女の前で泣いて見せる。良心の呵責に耐えきれずという感じに。

「ごめっ・・・ごめんなさい！！！！ウっ・・・っ・・・私・・・耐え、耐えきれなくて・・・彼に・・・宮内君に・・・宮内君に告白されたの！！！！ヒックヒック・・・本当にごめんなさい！！！！」

すると彼女は泣きそうな顔で、気にしないで、仕方ないよと言う。つける。ホントはつらくて仕方ないくせに。私に仕組まれたって知らないで。

超うける。こいつマジ面白いわ。

その他にも、中学の時から付き合ってる学校で有名な高三のらぶらぶカップルの男の先輩に近づいて別れさせたり。

同じ部活の子の、他校の彼氏をその子経由で知り合いおとしたり。同じ塾の子が先生とこっそり付き合ってることを知ると、先生に勉強の質問をすることから手始めに、二人つきりになるような空間をつくりじっくり時間をかけおとした。

他にも大学生の彼氏やらなんやら、たくさんの人ものをとった。人のものほどよく見えるふしぎである。

だから一度私におちると興味が無くなってしまふ。しばらく相手してポイしちゃう。

振る理由はお友達、または先輩に対して悪くて仕方がない。こんな耐えられない。ごめんなさい、別れよう。と言えば簡単だ。

次に目をつけたのは同じ部活の先輩だ。こいつは前から気に食わなかった。

だって私より人気なんだもん。

それに同級生がトイレで内緒話していた中に私と先輩を比べるものがでていた。

「あの子は確かに華奢で女の子らしくて可愛いよね。でもさ、高田先輩程じゃないんだよね。」

「わかるわかる！！男が『この子だったら俺でもおとせるかも、付き合えるかも』って思える程度なんだよね。」

「そうそう。手に届きそうな可愛さなんだよね。そういうのが一番もてる！！でも高田先輩は女神すぎて見るのも触れるのも恐れ多いんだよね。高根の花すぎて自分なんか・・・って思っちゃうんだよね。」

今まで言われたことのない言葉に、はらわたが煮えくりかえるとはこういう気持ちをいうのかと思った。

それから私はあの女に苦痛を与えるため、可愛い後輩として近づくことにした。

そのおかげで彼女の思い人がわかった。

あんなタイプと付き合ったことないや。面白そう。凄く男らしいタイプだ。

あいつこういうのが好きなんだ。

まず手始めに私はなるべく彼に気づいてもらえるように、わざと高三の教室の廊下を通って彼を探す。

どこかですれ違ったら恥ずかしげに見つめてすぐそらす。

彼とよく目が合うので恐らく彼も気づいているはずだ。

ただどなかなか告白してこない。あの女を介して、彼とお近づきになれるように色々としたが上手いことかわされて駄目だった。

他にも接触を持とうと待ち伏せしたりしたが、なぜか全く会うことができなかったりした。

こんなこと初めてでイライラした。

なんで私の思い通りにならないのよ。

焦れた私は自分から初めて告白してみることにした。

絶対の自信があった。

ただ結果は好きな子がいるから無理だという。

ありえない。それはあの女？

ムカつくムカつくムカつく

その後、あの女と彼は消えてしまった。まるで神隠しみたいに。一時凄い騒がれたけど、それももう忘れ去られてきている。良い気味。私の思い通りにならないからよ。当然の結果だわ。

「ねえ、結局彼と寄り戻したのよね？」

「うん。なんかね、あの時はマジでどうかしてた。俺ホントサイテーだよ。でも今になって気づいた。俺本当にお前が好きだ。別れたくない。やり直そうって・・・」

「あんたそれで許したの！？自分の勝手な都合で振っというてなによそれ！！」

「私も何度も断ったよ。もう傷つきたくないし、それって勝手だよ。今の彼女と仲良くなってる。」

「で？」

「でもね、ずっと一日に何回も言いに来るの。凄く真剣な顔して、俺は許してくれるまで、お前ともう一度付き合えるまで何度でも来るっていつて聞かないの。なんか私もほだされちゃって。」

「へえ、なんか凄いことになってるね。」

「うん。でも今、前付き合ってた時より幸せだし。ちょっと恥ずかしい言い方だけど絆が深まったっていうか・・・うん、前より凄く大切になってるってわかるし・・・」

「へいへいお幸せにねー！！ノロケはけっこうですよー！！」

「ノ、ノロケじゃないよー！！」

そんな話が休み時間の後ろの席から聞こえてくる。そういえば彼女の彼氏もおとしたんだった。

でも腹立つ。確かあの男は私が振った時はあっさり別れたくせに今の彼女には必死ですがりついたんだ。

そういえば、私、別れたくないって引き留められたことあったっけ？今まで自分の別れ方がうまいんだと思ってた。

だけどホントに別れたくなかったらどんな理由を示されてもあっさり別れられないんじゃないかしら。

私別れたくないって言われたことない。

必死になってすがられたことなんてない。

みんな、そっかって言って去って行った。

アレ？おかしくない？私おとしたんだよね。

好きにならせたんだよね？

そういえば小学生の時の同級生はどんな目で私をみてた？

中学の時の彼氏たちはどんな目をして私を見てた？

どういうこと？

あれから色々考えた。

そして出た答え。

私、何でも持てる気でいたし持っていると思っていた。
だけど私、何も持っていなかった。

空っぽの手のひらを見つめて思う。
私、何も手に入れてない。

第十四話 肝心なところがぬけている（前書き）

ヘイロネアの間抜け話です（；――）
シリ阿斯から一変です笑

第十四話 肝心なところがぬけている

今、この部屋には私と武藤君しかない。

騒ぐお姫様を連れ出して、私たちだけで話すことになったのだ。

二国間の和平の話よりも、彼女について知りたい。それとなんでココにいるのか……。

「……久しぶりね……武藤君。」

「ッ……あ、ああ。久しぶりだな、高田。」

名前を呼ぶと、彼は少しうろたえた後返事をする。息もできないくらいシヨックをうけていた身体が、彼の声を聴いて、彼に名前を呼ばれただけで、こんなにも歓喜して震える。

もう、何もかもがどうでもよくなってしまう。

私、もう大丈夫になったはずなのに……。思ってた以上にもこの世界に飢えてたみたい。

出会えた人が武藤君じゃなくても、もとの世界の人だったらどんな人でも嬉しい。

でも、武藤君だからより嬉しい。あのお姫様のことが無ければだけど。

「高田はなんでこの世界に？」

円卓の向かい合う位置で座って会話を始める。緊張で硬くなった身

体が、椅子の柔らかいクッションにゆっくり沈み込んで、どこまでも落ちていくような気がして怖くなる。
すがりつくようにひじ掛けをギュッと握る」。

「私は……私は……あの……放課後にね、学校の屋上に行ったの。そして気づいたら森の中で……。」

「森の中！？お前よく助かったな。それよりなんで屋上に？」

「私いつともたくさん食べるし友達ともお菓子交換するから、食糧は持ってて……それに怖い動物とも会わなかったし……だからギリギリなんとか生き抜いてこの国の人に助けてもらったの……！！……屋上は……うん、まあ色々あって……武藤君こそなんでココに？」

武藤君が告白されているのを盗み聞きして、あわてて逃げて屋上に行きましたなんて絶対言えない。

適当に流して、武藤君に質問を返す。

「俺も……少し事情があって屋上に行ったんだ。そして気づいたらヘイロネア国の王宮でおこなわれてた夜会のだ真ん中にいたんだ。」

「それがなんで使者としてここに？」

「話せば長くなるぞ？」

「時間はいくらでもあるわ。」

彼も緊張しているのだろうか。フウと小さく息をついて、私がいれ

たすつかり冷めた飲み物をいつきにあおるようにして飲みこんだ。
心なしか顔色もあまりよくない。

乾いた唇を一舐めしておずおずと呼びかける。

「……武藤……君？」

すると彼はゆつくりと顔をあげ私と目をあわせる。

合わせた瞳は少しゆがめられ、ほの暗かった。

「俺は……俺がこの国に来た理由は和平の交渉なんかじゃない。
……この国のトップを人質にして、内側からこの国を落すつもり
だったんだ。」

「……はっ？……ええー！！なにそれ！！やる
にしても一か八かの賭けみたいなものじゃない！！！」

だってもし、ラッキーで武藤君たちがアーシャルバーを人質にとれ
ても、この国の人たちがアーシャルバーを見捨てる可能性だって大
なのに！！そうしたら、窮地に追い込まれるのは彼らなのに！！

「王を盾に取られればどうしようもないだろう？」

「た、確かにアーシャルバーは国のトップよ。でも、王様とか陛下
とか皇帝とかああ！もう！兎に角、そういう意味には訳せないと思う
わ？歴史的な流れで言えば、この国にも王家にあたる一族はいたけ
ど、今政権を握っているのは彼らじゃない。国民なのよ。アーシャ

ルバーは国民に選挙によつて選ばれた、一国民で、在任期間も決まっているの。しかも独裁にならないように、独裁ストッパー係である民会のような組織メンバーも投票によつてきめている。確かにアーシャルバーはとつても大切だけど、王様ほど専制君主でいれないし、力があるわけじゃないのよ。そんなカンジだから、国民がアーシャルバーの命と引き換えに国の安定をとる可能性だってあるし、そうなるにあなたたちが圧倒的に不利よ？アーシャルバーは代えがきくもの。」

まくし立てるようにいつきに言いきると、武藤君はポカンとした顔を私に向けている。

私の荒い呼吸音しか聞こえない。

「……まさか敵のそんなことも知らずにそんな暴挙にでたと言わないわよね？」

「……しらなかった……ヘイロネアで王が人質に取られたりしたら、どんなことをしても、どんな犠牲を出しても救いだしなければならぬ。……もうこの国は王政ではないのか。」

飽きれて言葉が出ないとはこういうことなのか。

「とりあえず、ヘイロネアがとんでもなく絶対王政だということはわかったわ。」

第十四話 肝心なところがぬけている（後書き）

そうですね、ヘイロネアあほです。みんな自分とおんなじとおもっちゃいけないですよ。彼ら、平和ボケしちゃってるんです。

ヘイロネアはキツイ絶対王政で中央は華やかですが腐っているのも、重い税金や規則、領主や警備隊の横暴で国民は疲労しきってます。

感想をくれた方々、ホントにありがとうございます。

続きを楽しみにしているという感想のおかげで、なんとか続けていきます。

ほめてもらえたりすると、作者はかなり調子にのって喜ぶタイプです。それらの言葉がとっても励みになってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2170j/>

魔王と勇者は同級生

2010年10月29日07時35分発行